ジョジョとテストと奇妙な召喚獣

EXDEATH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジョジョとテストと奇妙な召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ３４８５Ｌ

【作者名】
ＥＸＤＥＡＴＨ

【あらすじ】
ジョースター一行がＤＩＯを討滅してから数カ月。
文月学園に『時を止める能力』を持つ、ある一人の人物が転校してくる…
そう、それが『奇妙』な学園生活の始まりだった…。
ジョジョ×バカテスのクロスオーバー作品。
嫌だ！　という方はドミネ・クオ・ヴァディスされないうちに回れ右。

男、校門にて。（前書き）

この作品が私にとって初の二次創作作品になります。

※承太郎が優しくなってます。

他にもバカテス原作からのパクリもとい似たり寄ったりの構文が出ますのでツッコまないで。

この作品は早めに終わらします。

どーせ見る人はいないだろうから。１０話ぐらいで終わるかな。

では。

男、校門にて。

「ば…ばかなっ！　こ…このＤＩＯが…」

男の体は砕け散ってゆく。

最後のジョースターの末裔によって、自身の体の子孫によって。

「このＤＩＯがァァァァァァ」

そして男の体は吹っ飛びんだ。

最早体はバラバラになって吹き飛んでいた。

そして、ジョースターの末裔である青年は、最後にこう呟いた。

「てめーの敗因は…たったひとつだぜ…ＤＩＯ…たったひとつの『単純（シンプル）』な答えだ……」

『てめーは俺を怒らせた』

そうして、星屑十字軍の長き戦いと、百年にわたるジョースター家とＤＩＯの因縁に、終止符が打たれたのだった。

◇

―それから３ヶ月後―

四月。

文月学園に植えられた桜は見事に満開に咲き誇り、学園に登校す

る生徒を華々しく出迎えている。

今日は一般的に言われる新学期の登校初日。道すがる生徒らは皆、妙にウキウキしている。

その桜吹雪舞う文月学園の校門に、ある一人の男が立っていた。

その男は二メートルはあるだろう、非常に長身な男だ。

次々と登校する生徒達を鋭くも冷たく睨み、他を寄せ付けない異彩を放っていた。

男は登校する生徒達とは少し違っていた。いや、全く別物だといっても良いだろう。

その男は、何故か『学ラン』を着ていたのだ。文月学園の制服とは全く違い、男の制服は改造を施されていて、その襟からは鎖がはめ込まれ、ボタンは第一ボタンどころか全て外されており、誰がどう見ても不良にしか見えない。

だが、それが非常にこの男に似合っていた。

そもそもこの文月学園は不良といえる不良は出現しておらず、誰もが怖がってその男の周囲に近付かなかった。

「全く……やれやれだぜ」

そして、その長身の男の名は、『空条（くうじょう）　承太郎（じょうたろう）』と言った。

◇

僕、『吉井明久（よしい　あきひさ）』はこの文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。

只今僕は道を全力疾走中。なぜかって？　遅刻しそうだからだよ。

昨日寝るときにきちんと目覚ましをセットしてから寝たはずなんだけれど…うん、二度寝したのさ。　ふと、学校へと繋がる坂を走りながら周りの過ぎ去りゆく景色を見る。
坂の両脇には桜が植えられて、その桜の花びらがひらひらと、かつ吹雪のように舞い散っていた。
僕は遅刻しそうだというのに、その華やかさに目を奪われた。
一枚一枚が華やかに、そして綺麗に散っていく。別に僕はロマンチストでもなければ、散りゆく花を愛でたりする人間でもない。
でも、そんな人間でも感動するモノはあるんだな。
でも、それも『時間』という流れには逆らえない。
今、僕の頭の中にあるのはこれから『戦争』を戦いぬいていく友とクラスの事だ。胸がドキドキしながら坂を上っていく。

「この前のテストは勉強しないでもなんとかなったし…ってうわ！？」

でも、やはり考えながら走っていたのが悪かったのか、校門に立っていた人にぶつかってしまった。ついでにぶつかる瞬間、僕の握っていた鞄を全て地面にぶちまけてしまった。

「いててて…」
「大丈夫か？　お前」
「あ、すいません…ってあれ？」

なんか手に何か握っているような感触がする…
よくみてみると、僕の手にはぶちまけてしまった筈の鞄が、そして中身も入っていた。

「あっ！　あれ！？」
「よそ見をしててすまなかったな……ん？」

「すみません！　悪気はなかったんです」
「いや、構わねえさ。立てるか？」

差し出された手を握った時、はっきりと全体像が見えた。そして、その男の人を見て再度驚いてしまった。
身長は二メートルぐらいあるだろう、凄く長身な人で、顔は物凄く男らしくてカッコいい。まるで外国人のようだ。
その男の人は僕の腕を掴んで立ち上がらせると、
「ほれ、遅刻するぜ。急ぎな」
と言った。
そうだ、思い出した！　遅刻寸前だったんだと思い出すと学校の校門に設置されている時計を見た。
うん、結果から言っちゃおう。

遅刻寸前…いや、遅刻です。完全に遅刻です。

「…言うまでもなく遅刻したようだな」
「はぁ…登校初日から遅刻なんて…」
ああ、なんてことなんだ！　僕のこれからの学校生活（食生活はともかく）が、『青春はっぴぃストーリー』が崩れ落ちていくぅ…
そんな事を考えて落ち込む僕はその長身の人に一言言って別れた。
あ、そう言えば何であの人は『学ラン』を着ていたんだろう…。
しかも改造学ラン…でも似合っていたなぁ。

◇

「吉井、遅刻だぞ」

玄関へ走っていた時、とある蛇の声にそっくりの渋くも重い、そ

んな声優のような声に呼び止められた。
そちらの方を見ると、そこには渋い声にベストマッチするかのような厳つい顔の先生が立っていた。

「あ、鉄じ…西村先生、おはようございます」

軽く頭を下げて挨拶する。
この人は西村先生、通称『鉄人』と呼ばれる男性教員である。その太陽に焼かれた浅黒い肌は先生の筋肉を更に誇張というかなんとやらだ。
ついでに、この人はかなり厳しい先生なので目を付けられると色々面倒なことになるので、みんなこの人の前では大人しいものだ。

「全く、初日から遅刻するなんてバカな奴がいたものだな」
「いや、今日は偶然…」
「遅刻は遅刻だ。…まぁいい。ほら、お前の組み分けの紙だ、受け取れ」
「あ、どーもです」

先生から茶色い封筒が手渡される。
この学校は掲示板に貼ればいいものをわざわざ手渡す方式だからちょっとめんどくさい。
聞いた話によれば、世界最先端のシステムを導入した試験校だからしい。うーん、
こっちの方が金がかかる気がするんだけど…

「吉井、俺は去年一年間お前の担任を務めて来て、お前に対する一つの考えが浮上したんだ」
「そうなんですか？」

ううむ、封筒が開きにくい。
「俺は『もしかしてコイツはバカじゃないか』、と思い始めたんだ」
「ああ、それは誤解ですね。そんなこと見ればわかるじゃないですか」

ええい、いっそのこと封筒を上から破くしかあるまい。
ビリビリと破くと、小さく折り畳まれた一枚の上質紙が入っていた。
ああ～さっきから心臓の鼓動が速い。さぁＤか、Ｅか？
「そして、お前の成績で全てを理解したよ。さっきのは完璧な誤解だった。喜べ、お前に対する疑問は払拭されたぞ」

折り畳まれた一枚の上質紙をゆっくり開く。

『吉井明久・・・Ｆ組』

「お前は、正真正銘のバカだ。そう、誤解の余地も残されていない、本物のバカだ」

こうして、僕達の『奇妙』な学園生活の始まりを告げたのだった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

承太郎、文月学園へ

学問のある人とは本を読んで多くのことを知っている人である。
教養のある人とはその時代に最も広がっている知識やマナーをすっかり心得ている人である。
そして有徳の人とは自分の人生の意義を理解している人である。

ｂｙレフ・トルストイ

「やれやれだぜ…」

承太郎は吐き捨てるように呟き、右手で帽子を微調整する。
彼は今し方転校の手続きを完了し、今は自らの行くべきクラスへ足を進めている。

「Ｆ組…か。ま、妥当な判断だな」

承太郎にあてがわれたクラスは『Ｆ組』。
理由は正真正銘の『不良』だったからだ、と面向きはそうなっている。しかし、本当はそうではなかった。前の学校ではケンカやタバコ、授業を抜け出すなどバリバリに荒れていた承太郎だが、ＤＩＯとの戦いで前のような荒れた性格ではなくなっていた。そう、知的で冷静。それが今の承太郎だ。
しかし何故、承太郎が転校する必要があったのか？　それには幾らか前に戻らなければならない。
それは、正に唐突だった。

◇

宿敵、ＤＩＯを討滅して３ヶ月。空条家には普段通りの平和が訪れていた。そう、幾つもの命を失いながらもこの平和を取り戻したのだ。
イギー、アヴドゥル、花京院…彼等の犠牲なくして今の平和はないだろう。

今、空条家には承太郎と母、ホリィの他に祖父ジョセフ・ジョースターが住んでいる。　妻のスージーＱはまたアメリカに戻ったが、このジジイはまだ日本に居座る気らしく今日もテレビを見ていた。
しかしその時、ジョセフは『あること』を承太郎に持ちかけたのだ。

「承太郎、いきなりですまんが転校してくれないか？」
「…は？」

承太郎は目を丸くした。

「転校じゃよ、て・ん・こ・う」
「おいじじい…何か企んでいるのか？」
「いやいや、何も企んじゃおらんよ。ただ転校して欲しいんじゃ…待て待て承太郎、スタープラチナで威嚇しないでくれぇ」

やれやれ、と承太郎は呟いた。
第一理由が無いのに転校するとか、何か企んでいるに決まっているだろうが。
それくらい気づけじじい。

「で、理由はなんだ？」
「なに、簡単じゃよ。承太郎、文月学園って知っているか？」

承太郎はその名に心当たりがあった。
確か、試験召喚システムとかいうのを導入して一時期ニュースになっていた…アレか？

「それがどうしたんだ」
「もともと試験召喚システムは我々ＳＰＷ財団の超能力研究部が『誰でも疑似的にスタンドを作り出せる空間』を作る為に開発したのじゃ。しかしまだまだ完全ではない。そこで承太郎、お前さんにこの技術がちゃんと出来ているか確かめて欲しいんじゃ」

そう、試験召喚システムはもともとスタンドがモデルなのだ。
自らの精神エネルギーを具現化し、デフォルメして召喚する。これは一種のスタンドと言って良いだろう。
ただし、承太郎のように既にスタンドを所持している場合はデフォルメされたスタンドを使うことが可能であり、それも他人が視認出来るのだ。

ジョセフは自らの首にある星形の痣を触りながら続けた。

「やっと手に入れた平和じゃ。そういう風に青春を過ごしてみるのもいいじゃろうて」
「…やれやれ、強引なじじいだぜ」
「承太郎、行ってくれるか？」
「…わかった、ただし！　俺はいざこざは嫌いだ。面倒な事が一番無いクラスにしてもらいたい」
「なんじゃ、そんなことか～。わしゃてっきり、一発ブン殴らせろとか言われるかと思ってたわい」
別にそんな気は無いのだが。

俺自身はいざこざがあまり好きではない。なのに『不良』と言うだけでケンカが絶えないのは何故だろうか。
そんな時、ジョセフは懐からあるものを取り出した。

「いや～最近のカメラは高性能じゃのう。いちいち三万円もするカメラをブッ壊さなくてもよくなったわい」
「じじい…『念写』するつもりか？」

ジョセフはデジタルカメラを机に起き、位置を固定する。
ジョセフ・ジョースターのスタンドはある意味で多少特殊だった。
ジョセフの能力は『ハーミット・パープル』。隠者の紫とも言われるそのスタンドはある種の未来予知をするのだ。いや、未来だけじゃない。ある特定の人物の事も『念写』が出来るのだ。

「ま、我が孫の転校祝いじゃ。”ハーミット・パープル”ッ！！」

そう言い放つと瞬間、ジョセフの腕と手にイバラともおぼしき植物が出現し、そのままデジタルカメラをブッ叩く。
その時、カメラはカシャッといいながら側面に付いているモニターにある風景を映し出していた。

「む、人…クラスメートじゃな。恐らく彼等がお前さんの同級生じゃ」

写っていたのは、男女が仲良く弁当を食べている風景だった。…一人は塩と水を手に持っているが。
あまり映りが良くない為に顔がぼやけていて良くわからないがどうやら男子三人、女子『三人』のグループのようだ。

「むぅ…やはりポラロイドカメラの方が良かったかも知れんなぁ。
ま、いいじゃろ」
承太郎はしばらく小さい液晶を見ていたが、やがてジョセフにカメラを返した。
「承太郎、頑張れよ」
◇
以上が、承太郎が文月学園にきた経緯だ。
「今思うとモノスゲー馬鹿らしく思えてきたぜ」
そう漏らさずには居られない。
第一じじいが直接くればいい話ではないか。わざわざ転校する必要はないだろう。
よし、帰ったら文句を言おう。
そう思いつつも階段を上がり三階に足を踏み入れると、すぐに目の前に現れたのは、
「…なんだ、このバカみたいにデカい教室は」
と、誰もが言いたくなるようなとてつもなく大きな教室だった。
気になって窓から少し覗いて見た。
まず目に付いたのはその広さ。教室の広さの感覚では考えられないような広さだ。
承太郎の前にいた学校の教室の三倍は間違いなくあるだろう。
作りすぎでは、という思いが去来する。

そしてその中央には、髪を団子状に纏めた教師が自己紹介をしているようだった。
すると、その教師の後ろにある黒板…いや、黒板ではない。あれはＳＰＷ財団製のプラズマディスプレイのようだ。
そのプラズマディスプレイに瞬時に『高橋　洋子』と表示される。
どうやらこのクラスはあのプラズマディスプレイで授業をするようだ。
個人的に黒板でもいいと思うのだが。

承太郎は次に生徒の方を見た。
そこも常識からかけ離れていた。

『ノートＰＣ』、『エアコン』が一人につき一台付いており常に生徒が快適に、調べ物には困らないように配備されていた。
さらに見やると生徒はリクライニングシートに深く座り、非常にゆったりとした環境で勉強が出来るようだ。
更に…端には冷蔵庫完備。
コレには流石の承太郎も驚嘆の眼差しを向けるしか無かった。

「こいつぁ…グレートだぜ…」

呆れながらもそう呟くしか無かった。
その時、一人の少女が席を立った。黒髪を肩まで伸ばして容姿端正な、正に日本人形のようだ。
しかし、彼女は何者も近づけぬ威圧感も同時に発していた。

「…クラス代表、か」

恐らくあの少女はクラス代表、つまり学年の中でも、更にはＡクラスの中でも一位に君臨しているのだろう。

そんな彼女を周囲の人は羨望の眼差しを送っていた。
そんな少女の姿に、在りし日の宿敵ＤＩＯの姿を重ねてしまい、ちょっと嫌な気分になった。

「やれやれ、奴の姿を重ねちまうとはな」

承太郎は踵を返し、ゆっくりと自身の行くべきであるＦ組へ歩を進めた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

承太郎、文月学園へ（後書き）

字が読みにくいっすね。

承太郎は優しくなった、と考えて下さい。

原作通り（前書き）

ここは正に原作通りなんで。

原作通り

次の問いに答えよ。

相手に完全なるトドメを刺す時に使う物のうち、この世で最も効果の高いものを二つ上げよ。

姫路瑞希と空条承太郎の答え
『道路標識とロードローラー』

教師のコメント
何故答えがわかったのでしょうか？　先生は疑問に思いますが一応正解です。

土屋康太の答え
『パンツと裸』

教師のコメント
確かに男性にとっては凶器ですね。

吉井明久の答え
『暖かい家と料理』

教師のコメント
確かに。

◇

「すいません、ちょっと遅れちゃいました」
「早く座れ、ウジ虫野郎が」

うわっ、いきなりの罵声だ…。
僕はただ遅刻してきただけなのに、その言い草はないだろう。僕は睨みつけるように教壇に立っている男を見た。
その男はワイルドさと不良成分が混じったような、正に『頭領』という風な出で立ち。１８０センチは間違いなくあるだろう、その男は教師では無かった。

「…なんだ雄二かぁ。何やってんの？」

彼は『坂本　雄二　（さかもと　ゆうじ）』。僕にとっては悪友だ。

「先生がまだ来ていないから、とりあえず教壇に上がってみたんだ」
「へぇ、雄二が」
「ま、一応クラス代表だからな」
「へぇ、クラス代表…って、雄二が！？」
「そうだ」

そういう雄二は誇らしげに…いや、憎らしげに微笑した。
つまり、いま現在はＦクラスは雄二の管轄に置かれている訳か。なるほど、一般的に言われる学級委員長的な立場なわけね。

「つまり俺より強い奴はこのクラスにはいないわけだ。勉強にしても、ケンカにしてもな」
「まぁ雄二は強いからね。ケンカとか」
「ああ、どんな奴もぶっ飛ばしてやるぜ」

これなら心強い。こういう情熱タイプの人はみんなを纏めるのが無駄に上手いよね。
僕はふと、周りを見渡す。
「でも、この環境は…」
床は畳でその上に卓袱台、椅子はなしのようだ。
これはノミとかダニ（ダニーじゃない）とか発生したら『何をするだァーッ！　許さん』とかいいながら駆除するしかない。
「ん、先生が来たぞ」
僕らはその雄二の情報どうりに畳に座った。
「おはようございます。担任の『福原（ふくはら）　慎（しん）』です。よろしくお願いします」
暗い、覇気のない喋り方をしながら先生は自己紹介をする。
髪は寝癖がつき、更には服もヨレヨレだ。これじゃ不審者か疲れ切ったサラリーマンに見えなくもない。
先生はその後備品の確認をしたが、生徒からは『座布団に綿が少ない』だの『卓袱台の脚が折れてる』だの『窓が割れて寒い』という風な苦情にも先生は丁寧に対応していた。
「…あらかた確認は終わりましたね。じゃあ次は自己紹介でもしてください」
半ば投げやりな言い方だが、そういう風な言い方が先生の個性なの

かもしれない。
そのみすぼらしい先生から指名されて、一人の人物が立ち上がった。
「『木下（きのした）　秀吉（ひでよし）じゃ。演劇部に所属しておる」
おお…立ち上がったのは秀吉じゃないか！
彼は正に『男の娘（おとこのこ）』、遠くからも近くからも正に女の子の秀吉じゃないか！
彼は演劇部で、ほとんどの役割をオールラウンドでこなす。声帯模写もお手のものだ。
ただ、彼には何時も女役が付くようだがね。
そんな秀吉を周囲は恋愛感情混じりの熱い目線で見る。
「…いま凄く嫌な予感がするのじゃが…とにかく一年間よろしく頼むぞぃ」
我々の熱い目線に気付いたのか、いそいそと畳に座った。あ～ん、秀吉が座っちゃったぁ～ん
そして次々と自己紹介は進み、
「……『土屋（つちや）　康太（こうた）』」
うん、次も知り合いだ。
小柄で運動神経も僕よりいい。でも暗い。
彼はいつも喋らないが何をしているんだろう…。目立つと喋れなくなるタイプかな？　まぁイロイロと。
まぁしかしなんだ、男だらけだな。
「島田美波です。海外育ちだけど英語は苦手です」

その時響いたのは女の子の声だった。
僕はその声に過剰反応してしまう。

「し…島田さん！？」

そう、島田美波。一年のクラスメートにして僕の天敵だ。
その島田さんは更に続ける。

「…趣味は、明久を殴りぬけるッ！　です」

って、ちょい待てぇぇぇ！
なんだそのドSな趣味は！？　女の子らしい趣味といえば料理とか買い物じゃないの！？　てかそれ趣味じゃないよ！
その島田さんは僕の心境を無視するようにこっちに手を振ってきた。
…いかん、この後目から血を出すハメになるかもしれない…。

そして巡りめぐって次は僕の番だ。

「僕は吉井明久、よろしくね♪」

シィーン。

「え、なに？　この反応何！？」
「吉井、座れ」
「雄二おかしいよ、本当なら拍手喝采じゃないの！？」
「お前に限ってはそれはないぞ。分かったなら座れ」

はぁ…新学期で一番大事な自己紹介を一撃の下に沈められた…。
Fクラス、恐るべし。
その後も名前と一言をいうという単純な作業は忠実にすすみ、男だ

らけの野太い声にいい加減飽きがきた時、正に不意にドアがガラリと開かれた。

「はぁはぁ…その、遅れて、すいま、せん…」

そう、二十の意味で僕達はびっくらこいた（死語）。
現れたのは正に美少女。…クラス、間違えてない？

「おっと、姫路さんでしたか。丁度自己紹介の途中でしたから、姫路さんもお願いします」

先生は淡々と催促している。
やはりFクラスなのか？

「『姫路（ひめじ）　瑞希（みずき）』といいます。よろしくお願いします…」

深々とお辞儀する。
頭を垂れる時にかなり長い桃色をした彼女の髪は竜洋に流れる。その声帯から発せられる声は最早サラ・ブライトマン並みだ。

「はい、質問いいですか？」
「はい？」
「どうしてF組に…？」

そう、僕達はそれが聞きたかった。
彼女はたしか学年で一桁、それも五指には確実に入る天才のはずだ。
間違ってもFクラスには縁もゆかりもない筈。
それとも、何かしら事情が…

「あの、私は組み分け試験で倒れちゃって…」

あ、そういえばそうだった。周りも『なるほど』と頷いている。
途中で倒れたならそこで『リタイア』になり、そのまま零点扱い…
ということか。

姫路さんは先生に促されるまま僕の近くの所に座った。
僕らはすぐさま姫路さんに自己紹介をし、きっちり顔を覚えてもら
う。え？　フラグ？　死亡フラグは立てないさ。

「姫路さんは熱は大丈夫？」
「あ、はい。すっかり良くなりました」

良かった良かった。
姫路さんは体が華奢そうだからなぁ。あまり病気とかには強くない
だろう。

「明久のブサイクさを見て具合が悪くなったら言ってくれ。処理す
る」
「ええ！？　それはどゆことなのさ！？」
「心配するな。墓は建ててやる」
「そ、そんな！　吉井はカッコいいです！」
「あ…ありがとう、姫路さん…」
ああ、最高じゃないか…
こんな美人な人にカッコいいと言われるなんて、一生の内に一度あ
るかないかだよ！
少なくとも僕は容姿に関しては自信を持つことが出来たよ！

「慈悲深いな、姫路は」
慈悲じゃないよね！　姫路さん！

まぁともかく、自己紹介は終わったのだった。

◇

「あのー盛り上がっているとこ悪いんですが、転校生がいます」

「「な…なんだってェェェェーッ！」」

僕らは不意の先生の言葉に、全員が合唱した。

そう！　本当の自己紹介はまだ終わっていなかったのだ！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

出逢い

人それぞれに荷物の重さは違う。
与えられた荷物の重さは変えられないし、
自分の荷物を捨て去ることは
人生を放棄することである。
しかし、持ち方を変えることで、
随分、楽になるのである。それが、
「自分の意思で人生を選ぶ」
ということだと思う。

（不明）

◇

『転校生』
ああ、なんて素晴らしいイントネーションなんだろう。
僕は今、これから来るであろう転校生に思いを馳せていた。

「ねぇ雄二、転校生って美人かな？」
「さぁな。ま、今はそういった話はしない方がいいぞ」
「え、なんで？」
『あ～き～ひ～さぁ～』

首を傾げる僕の後ろには、島田さんがいた。はて、どうしたんだろう…。なぜか島田さんは握り拳を作りながらこちらに近付いてくる。…ちょっと怖い。

「え、どうしたの島田さん…ってちょ、その振り上げた腕をどうす

るつもりッ！？」
「無駄ァ！」
島田さんは僕の腹を打つ。その痛みが体中を駆け巡り、ついオゲェとなってしまう。
「まずボディを打って動きを止める…そして！　私の純情を弄んだ罪を…味わえぇぇぇぇ！！」
更に腰を落とし、体重を右腕に集中させ…渾身の一撃を放つ。
その流れ星とも見える弾丸は真っ直ぐに、僕の顔に吸い込まれるように入った。
「顔面に一撃…でも、まだよ！　このまま親指を明久の目の中に……突っ込んで…」
『殴りぬけるッ！！』
島田美波の一撃は正に鬼畜だ。
彼女はもはや想い人の体を考えずに、そう…これが彼女なりの愛情表現だと言わんばかりに。
「うんぐあぁぁぁ！！　目が、目がぁー！」
「ふん、いいザマよ」
「本当です！」
「ひ…姫路さん？」
姫路さんまで！？　何故に！？
うう…殴られてからの更に追撃だよぉ…もう生きて行けない！
ってか目が痛い…。

「あの〜、言って置きますが男子です」
「は…早く言ってよ！　先生〜」

◇

「では、入って下さい」
俺は中の先公の指示に従い、ドアをガラリと解き放つ。その時、一陣の風が教室に流れ込む。
ズンッ、と二メートル近い巨体が、されど限りなく鍛えられた筋肉が教室に入る。

「あ…」
「来たぞぃ」

クラス中はざわついている。まぁ無理もないか、いきなりの転校だからな。
俺はそんなクラスをなだめるように、無言の圧力を掛けた。すると直ぐに辺りは静まり返る。
「では、自己紹介をしてください」
やれやれ、と呟きながらかなり装飾が加えられた帽子を更に深くする。
「…俺は空条　承太郎。趣味は特にない…これでいいか？」

「はい！」

突如として近くから手と共に声が挙がった。
その少年は自分より小さい（当たり前か）が、髪は茶髪である。
隣にいた先公はその少年に質問することを許可し、少年は立ち上がる。
承太郎は来るべき質問に、すこし身構える。

「名前はなんて言うんですかー！」

……予想外だ。
こ…こいつ…予想を遥かに超える質問をしやがる…。
そもそもさっき名前は言っただろうが！

「こ、こら明久、失礼じゃないの！！　無駄無駄無駄ァ！」
「ちょ、足をかけて僕を倒してからのドミネ・クオ・ヴァディスですか痛い痛いィーッ！」

その少年は女子に足を掛けられたあと、すぐにプロレス技を掛けられていた。
ハッキリ言っとくが…こいつらはマジにこんな奴らばかりなのか？
その時、承太郎はその少年を持ち前の鋭い眼光で見た。

（ん？　コイツは今朝の奴じゃねえか）

承太郎は一つ心当たりがあった。
そう、今朝に承太郎にぶつかってきたあの少年。承太郎が記憶している限りではこの少年に間違いはないように思える。
一方、少年…明久もその事に気づき始めていた。

（あれ？　この人…改造学ランの？）

未だにプロレス技を受け続けていたが、その思考は働いていた。
承太郎はその疑問を口に出す。

「一つ訪ねるが…てめぇは今朝の、か？」
「そういう君も、今朝の？」

間違いない、彼だ。

「そうか、このクラスだったのか」
「まぁ、ね。あははは」
「って、二人は知り合いなの？」

その少年にプロレス技をかけている少女は聞いた。

「うん、朝にちょっとね。だから離してくれない？」
「へぇ」

ようやく少女は少年から離れる。
さっきまで首を絞められていた少年は、結構ケロリとしていた。
承太郎は、こいつらは本当にわからん奴らだ…、と思った。

◇

その後、承太郎はクラス中から快く歓迎を受けた。
先生はふとした事から大破してしまった教卓の代わりを持ってくる為に足早に教室を出て行った。
そして先生がいない自由時間に一人づつ自己紹介していった。

「木下秀吉じゃ、よろしくのっ！」
「……土屋康太」
「島田美波です、よろしく！」
「姫路瑞希です。よ、よろしく」
「で、僕は吉井明久。隣にいるのが…」
「Ｆクラス代表の坂本雄二だ。よろしく」

承太郎はその自己紹介にきた数人の生徒に対して、一人づつ握手をしていった。
各個人とも、仲間が増えたことに嬉しいようで、よく話しかけてきてくれた。
その内、先生も教卓を抱えて戻ってきたので談話は終わりにした。
その時、雄二と呼ばれた体つきがいい生徒が教室の黒板の前に立った。

「みんなに、一つ問おう」

全員の目線が雄二に集中する。
雄二はそれを感じながら言った。

「この教室…ひび割れた窓、畳の床、更には机代わりの卓袱台…不満はないか？」
『『大有りじゃあああああ』』

全員が高らかに叫ぶ。
それは皆の心から、魂の雄叫びと表記すべきか。畳は響き、卓袱台は微かに震える。
その全員の団結力にややビックリしながらも承太郎は冷静にやれや

れ、と呟いた。

「そうだ、俺も不満だ。これでは勉強すらまともに出来やしない」

『そうだそうだ！！』

「これは偏差値の格差に更なる影響を与えるだろう。だが！　我々にはそれを覆す方法があるッ！」

『ま…まさか、戦争を！？』

一人の生徒がたじろぐ。

雄二はああ、と答える。

「Ｅｘａｃｔｌｙ．俺は、いや…俺たちはＡクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う。いや！　仕掛けなければならない！」

『おお！！』

「覚悟こそ幸福、という言葉を覚えていてくれ。どんなに無謀だろうと、少しでも勝機があれば…やるしかない！！」

雄二は腕を振り上げ、そう宣戦した。

承太郎にはそれがヒトラーか何かの革命家もしくは政治家の選挙前の演説に見えてしまったのでやや苦笑した。

雄二には人を引っ張っていく、人を魅了する『カリスマ』があるのかもしれない。そう、かつてＤＩＯという男が世界を支配するに足るこの能力が。世界の男女がＤＩＯに従ったのもこのカリスマのせいだろう。

「だから俺は…Ａクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

そうして、Ｆクラス代表…坂本雄二は『試験召喚戦争』のトリガーを引いた。

「やれやれだぜ」

承太郎は呟く。

そして、彼らの戦いが始まる…！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

出逢い（後書き）

うほっいい男！

やらないか

…と言われたくはないです。

じょーたろー

「マヌケが……知るがいい……」
「『世界』の真の能力は…まさに！　『世界を支配する』能力だということを！」

『世界！！』

ｂｙＤＩＯ

勝てるはずの無い相手との戦い。
それは無謀かつ常識的には有り得ないことだ。
Ａクラスと比べて戦力が大きく劣っているＦクラスは正にそれだ。
簡単に言えば風車に突撃するドン・キホーテ。
勝てるはずがない。

文月学園には点数の上限がないテスト方式が採用されている。
これは一時間内により多く、正確に答えを導く事が必要とされる為に各個人の能力が明瞭に出される。解釈を変えれば、能力次第で成績を伸ばすことが可能な訳だ。
また、スピードワゴン財団によりスタンドを参考にして開発された、『誰でもスタンドを擬似的に発現出来る空間』…その名も『世界（ワールド）システム』、通称『試験召喚システム』。
これはテストの点数に比例した強さを持つ『擬似スタンド』…『召喚獣』を呼び出して戦う事ができ、これには教室の立ち会いの下に行使が許可される。
『スタンド』という能力は世に知られていない為、『世界シ

ステム』は科学とオカルトにより偶発的に開発されたと言われる。
そこで重要なのがテストの点数なのだが、区分けされるとーり頭がいいAクラスとバカFクラスの差は天地ほど離れていると言って良いだろう。
このまま正面切って戦ったとしてもAクラスに無双されて『ハイ終了〜』という風になりかねない。

「俺が勝たせてみせる」

そう宣言する雄二は、その圧倒的な戦力差を理解しているようだった。

『やっぱり無理じゃね？』
『民兵が武将に戦いを挑むようなモンだからなぁ』

やはり否定的な言葉が飛び交う。
そりゃそうだ、ここまで戦力差がハッキリしている勝負も珍しい。

「雄二…と言ったか、一つ質問いいか？」

承太郎は静かに言った。
雄二もなんだ、と対応する。

「何か自信でもあるのか？　根拠を上げてくれ」
「ああ、根拠はある」

その言葉に周りはどよめく。
やはり驚きは隠せないようだ。

「まず土屋康太。コイツは保険体育にかけては天才的だ。そして…二つ名は」

皆が固唾を飲みながら言葉を待つ。

「コイツの二つ名は…『寡黙なる性識者（ムッツリーニ）』だ」

『『な…なんだってぇぇぇぇ！！』』

「……！！（ぶんぶん）」

ムッツリーニ。

それはエロに固執し、それを生きがいとする人間に与えられる称号。

そして男子からは賞賛を、女子からは軽蔑の代名詞として語られている。

ハッキリ言ってムッツリスケベの略なのだろうが、それに尊敬の意を込めてムッツリーニという二つ名にしたに違いない。

「そして姫路瑞希。彼女はFクラスの主砲だ」

「そ、そんな…私なんて…」

彼女はAクラス並みの実力。十分活躍してくれるだろう。

五指の一人に入る実力は伊達じゃない。

「木下秀吉もいる」

『おぉ…キター！』

『流石秀吉！　俺たちに出来ないことを平然とやってのけるッ！！

そこに痺れる憧れるゥ！！』

「あ…ああ、そうかの…？」

彼女も（※承太郎はまだ男子という事に気付いていません）雄二から指名されるなら、なかなかのやり手と推測される。

『確か坂本は昔、神童とか呼ばれてなかったか？』

『そうか、そうだったな』

周りが口々に言い合う。

なるほど、Ａクラスに対抗出来る原石は十分ということか。

原石は磨けば光ると同じように、このクラスも鍛えれば光る、ということだ。十分とはいかないだろうが、対抗は出来るはず。最弱が最も恐ろしい。それは身を持って知っている。

『吉井明久だっている』

――『ザ・ワールド！！』――

というＤＩＯの叫び声が聞こえて来たように静かになる。

『観察処分者』

この声が微かに聞こえた。

『バカの代名詞、だよな。それ』

「ああ、言うまでもなくバカの代名詞だ」

「ちょ、雄二！　何故僕の名を出すの！？　そこは別の人じゃないの！？」

「……」

「ゆ、雄二…答えてよぉぉぉ」

明久の無痛で痛々しい叫び声は虚空に消えてゆく…
そしてだんだんと志気は下がりつつあった。

「あの…観察処分者ってどういうのですか？」
姫路が雄二に質問する。
承太郎もちょうど気になっていた所であり、雄二の反応を待った。
雄二は口の両端を少し釣り上げながら言った。

「観察処分者ってのは、バカな奴に与えられる称号なものだ。そしてそいつには特殊能力があるんだ」
「へぇ…」
「それは『モノに触る事が出来る能力』。主に教師の雑用や重い荷物を運ぶことだ。そして召喚獣が受けたダメージは何割かが本体に返る」
「なるほど…スタンドと同じタイプだな」
「スタンド？」
「いや、気にするな」

今はスタンドの事は言わなくてもいいだろう。
流石にスタンドを参考にしてシステムが作られただけはある。
ダメージまで本体に返るとは、スピードワゴン財団はすごいものだ。スタンドの場合はシルバー・チャリオッツやノトーリアス・B・I・G等を除いて全て反射されるが、観察処分者の召喚獣はそれが数割。ちょっとうらやましいものだな。しかし、自分の意志では使用出来ない為に、その点はスタンドが勝っている。
どっちもどっちな訳だ。

「とにかく、力試しにDクラスを制圧しようと思う。いいか？」
「うわ、見事なまでにスルーされた！」

明久は若干落胆していた。
…まぁ、同情するぜ。

「皆、不満じゃないのか！？」
『不満だぁぁぁぁー！！！』
「ならば鉛筆を取れッ！！　出陣だッ！！」
『族長ッ！　族長ッ！』

奇妙な叫び声が教室を木霊する。
ってか、この『族長ッ！』はないだろ…普通はよぉ…
雄二は教卓を離れて明久の目の前に立った。
そして

「明久、Ｄクラスに宣戦布告してこい」
「…え？」

明久は目をパチクリさせている。
少し思うのだが、雄二自身が行けばいいじゃないか？　代表が普通は布告すべきだろう。
明久もそれは理不尽だ、とさぞかし思っているに違いない。

「お前はそれが適任なんだ、Ｆクラスの宣戦布告をＤクラスに見せつけてやれ！」

雄二は明久の肩をぽんっ、と軽く叩く。
まぁ、その後は揚々と簡単に明久は騙され、宣戦布告に行ったことは想像に難しくないことだった…。

勝とうとして下から這い上がってくる奴を誰も蹴落とす事は出来ないのだ。
そして、それは大きな力を持っている。

to be continued・・・

開戦

我々にとっての最大の栄光は、
ただの一度も失敗しないということではなく、
倒れるごとに必ず起き上がることだ。

◇

「吉井、Dクラスと木下達が廊下で交戦状態に入ったわ！」

そう言ってくるのはポニーテールが特徴の島田美波さん。
ポニーテールは可愛いんだけど、何か足らないような気がするのは僕だけかなぁ？

「……ドミネ・クオ・ヴァディス」
「ちょ、それだけはぁぁぁぁ」
「次は無いわよ」
「善処させていただきます」

今、僕達はDクラスと戦争状態にある。
Dクラスぐらいなら勝てない訳はないかもしれないけど、初めての戦争だからちょっち緊張する。

「あれ？　空条君は？」

島田さんはここにいる人の顔を見渡す。

「ああ、承太郎くんならテストを受けに行ったから……」
「よう、待たせたな」
そう言った直後に承太郎君が出現。
僕はお帰り～、と承太郎を出迎え、これからの事を話す。
「承太郎君、これから僕らはDクラスを討つわけだけど――」
「問題ねぇ。片っ端からぶっ飛ばすだけだ」
承太郎君の気の強さというか精神の強さは伊達じゃない。
この人はやる時にはやる性格なんだろうな。

「それと、一つだ」
「え？」
「俺の名前を呼ぶなら、『ジョジョ』か『承太郎』を呼び捨てで構わん。君とかいらねぇ」
「うん、わかった。承太郎君」
「やれやれ、お前がそう言いたいなら構わねぇが……」
承太郎は冷静な顔をしているが、その口の端が少しだけつり上がったのを見た。
その時、うちのクラスの男子が全力疾走でこちらに走ってくるのが見えた。
「た…大変だ！　Dクラスの別働隊が前線に来たって！」
「何だって！　今までの人数でギリギリなのに……」
「吉井、行くわよ！」
「わかった。全員、我らが秀吉を助けに行くよ！」
「「おおー！」」

クールな承太郎以外はそれを叫んだ。やはりFクラスの美少女である秀吉を助けなきゃ男の名が廃るよね！
そして僕達は戦場に向かって全力疾走をしていた。勿論それも我らが秀吉の為、Fクラスの勝利を思ってのこと。

すると、前方で激しい戦いの音が響いていた。

「おお明久、援護に来てくれたんじゃな！」

召喚獣を出しながら後退してきた秀吉がいた。
ああ、うっとりする程カワユスなぁ。

「秀吉、大丈夫？」
「まだ辛うじて生きておるレベルじゃ、これ以上の戦闘は無理じゃな」
「そうか……じゃ、早く回復試験を受けて来なよ」
「そうするとするかの。明久、後は任せたぞぃ」

そういって秀吉は回復試験を受けに教室へ走っていった。
その後ろを続く人も同じ目的なんだろう。
幾らか人は減っている。つまり『再起不能（リタイア）』して補習行きなんだろうか。
ちなみに回復試験とは、戦いの中で消耗してしまった点数を回復できるテストのこと。
これがある限り、生きていれば何度でも戦闘は可能な訳だ。

「吉井、来たぜ」

承太郎が指を指す先には、生徒が先生を引っ張って連れて来ているのが見えた。

引っ張られているのは恐らく化学の先生だろう。
「島田さん、化学は出来たよね？」
「ええ、６０点は常連よ」
それが１００点満点のテスト方式だったらなかなか良い点なんだろうけど、この学校じゃお粗末にも良い点とは言えないな。
「あ」
その声が聞こえたのは偶然だろうか。
「お姉様ぁぁぁぁぁッ！」
「み…美晴！？」
島田さんが怯えている。
確か相手は美晴、と言ってかなりの島田さん信者だったっけ？
その美晴さんが島田さんの目の前に立ちはだかった。
「お姉さま、ここは譲れません！」
「美晴……何をする気？」
「ここでお姉さまを倒して私も補習を受けるんです」
「ちぃ、戦うしかないわね……」
「行かせないですよ！」
『『――試獣召喚っ！』』
……彼女達は放っておこう。
「……吉井」
「なに？」

「あーゆー風な奴らしかいないのか？」
「さぁ？」

承太郎はやれやれ、と呟きながら帽子を被り直す。
改めて見たけど、承太郎の身長って高いよね。
２メートルは優にあるだろうな。僕も背が高くなりたい。

「たああっ！」
「きゃっ！　お姉様ぁぁぁぁぁ」

どうやら早くも島田達の戦いは片付いたようだ。
そしてどこからともなく鉄人が出現し、「戦死者は補習ッ！」と言いながら美晴さんを担いで連行する。
この戦いで戦死してしまった者は鉄人に補習授業を受けさせられるのだから怖い。しかもそれまで召試戦争が終わるまでというからなおさらタチも悪い。
連行されて去ってしまった者達の為にも、早く終わらせなければ。

「吉井、逃げようとしたの？」
「え？　まぁそりゃ、ね」
「……ドミネ・クオ・ヴァディス」
「うわあああ！　腕はそこまで曲がらないぃぃぃ」
「吉井……同情するぜ」
「承太郎君まで！？　痛い痛いって！」

島田さんは無条件に攻撃してきたが、何も僕はしてないよ！
腕が折れる寸前まで島田さんは容赦ない攻撃が続いた。

◇

「おい、そこの長身の男っ！」
唐突に廊下に野太い男の声が響いた。
承太郎はその発声源の方を見ると、そこにはDクラスの男達がいた。

「長身の男てぇと、俺の事か？」
承太郎は今まで『長身の男』と呼ばれた事が一度もなかったりする。
故に自分が呼ばれているのに若干の時間を要した。

「そうだボケナスがぁ」
「目障りだ、消えてもらう！」
「よし、俺も参加するぜ」

大体3人ぐらい集まっただろうか、全員が『試獣召喚っ！』と野太い声が重なる。

「よ、よし。僕の初陣を――」
「待て、吉井。コイツ等は俺が片付ける」

承太郎はポケットに手を突っ込みながら男達を睨んだ。
虫の居所が悪い、と言わんばかりにこう言った。

「テメーらを倒すのに時間はかからねぇ。だが、今のうちに言っておくぜ」
「な……」

「補習を受けたくないなら止めておけ。今なら見逃してやるぜ」
「じ、冗談しゃねえ！　俺達は生物でやってやる」
男達は3人同時に『試獣召喚』と野太い声が重なる。
承太郎はあまり乗り気がしなかったが、やらない訳にもいかないので、やれやれと吐く。
「…試獣召喚」
その時、その場に居た人は承太郎が召喚した召喚獣の姿に度肝を抜かれた。
「なにあれ……」
島田が呟く。
承太郎が召喚したその召喚獣は、明らかに『デフォルメされた空条承太郎』ではなかった。
その姿は凛々しくもどこか力強く、まるで彫刻に掘られた古代戦士を起想させる。
体は蒼く、肩にはアーマーが付き、筋肉が正に隆起してとても強そうな召喚獣だ。だが意外なことに、武器を装備させていないようだ。
「やはりスタープラチナか……」
「承太郎、これは？」
「さあな。下がってろ」
承太郎は吉井と島田を下がらせると、3人のもとへ振り返った。
「やれやれ、面倒だな」

「や、やっちまえ！」

男達の召喚獣が、一斉に承太郎の召喚獣を襲う。
男達の召喚獣の武器は刀とサーベルのようだ。
承太郎の召喚獣はひょいと軽く攻撃をかわし、攻撃をかわされてしまい、不覚にも承太郎に後ろを見せてしまった一人の召喚獣に一発、強烈なパンチをお見舞いする。
そのまま殴られた召喚獣は遥か後方にぶっ飛んで行ってしまった。

「な、なにぃ！？」

ぶっ飛んで行った召喚獣は壁にめり込み、既に零点になってリタイアしてしまっていた。
そして、参考として頭上に表示されている点をよく見てみれば…

『空条承太郎…４５０点
城崎廉太郎…９８点』

「か、格が違う…」
『戦死者は補習ッ！！』
「ひぇぇぇ～」

ヨロヨロとひざを付く城崎は、いつの間にか出現していた鉄人に連行。
その間にも承太郎の召喚獣は容赦なく攻撃を開始する。

「行くぜオイッ」
『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラァッ！』

吉井達は言葉も出なかった。

承太郎の召還獣の猛烈なラッシュを肉眼で捕らえることができなかったからだ。
唯一視認できたのはスパスパと削られてゆく相手の点数。
それはそうだろう、承太郎の召還獣の攻撃スピードは優に光速を超えているのだ。
これはスタンド使いにのみ許された攻撃方法なのだ。
スタンドと召還獣の操作はほぼ同じ。自らの精神力と能力によって動かす。承太郎の召還獣はスタープラチナを基準にしているためにラッシュを繰り出せたのだ。

「さて鉄人、後はまかせたぜ」
『戦死者は補習ぅぅぅー！』

『決着ぅぅぅぅ！』

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

開戦（後書き）

承太郎って17歳なんすよね。
パラドックスだけどご都合主義で。

決着ウウウウ

Many of life's failures are people who did not realize how close they were to success when they gave up.

失敗する者の多くは、あきらめてしまうとき、自分がいかに成功に近づいているかに気付いていないのである。

Thowmas Edison

◇

「承太郎君、さっきのは一体なんなの？」

吉井は俺に聞いてきた。

俺としては答えるべきか迷うところだが、吉井達に説明しても信じてはもらえないだろうな。

今は適当にはぐらかすのがベストだ。

「――俺の召喚獣はちと特殊らしくてな。だからあんな姿なんだ」

「でも、明久の観察処分者のような特殊能力はないんでしょ？」

「島田さん……酷い」

「特殊能力、というのも違うかもしれんが、一応そういった能力はないな。もともと自分の精神の形を形にするようなモンだからな」

「精神を形に、ねぇ」

やはりイマイチ理解が難しいようだ。

精神論を引き合いに出してもFクラスには難しかったか？　まあいい、とにかく今は慎重になるべきだ。
とりあえず今は点が少し減っている島田を回復試験に行かせ、俺達は次の戦場へ行った。

「く、やべぇ…」
「押されているのか、くぅ…」

先ほどの場所からやや行った辺りに次の戦場が展開されていた。
教科担当を確認すれば現代文のようだ。
既に何人かの戦死者が出ているらしく、戦況は押しも押されつの状況のようだ。

「面倒だな、一気にやるか」
「わかった――試獣召喚」

2人して叫ぶ。
叫んだ直後、足元に現れる魔法陣。
俺がスタープラチナを出すときのような力が出ていくような感覚。
そのエネルギーが、俺達の隣に一つのビジョンを映し出す。それが、召喚獣だ。
俺の召喚獣はスタープラチナだが、吉井の召喚獣は木刀を握り締めて特攻服を来ている。

「我が名は吉井明久。これからFクラスの為、学力勝負をするッ！」
瞬間、吉井の召喚獣が地面を蹴って敵の懐へと潜り込み、そのまま一閃。
しかし、点数が少ないせいかそこまでのダメージがないようだ。

「ちぃ、やっぱりか……」

吉井はそう吐き捨てると、そのまま木刀による剣舞を相手に叩き込み、ジリジリと点数を削る。
相手も負けじと反撃してくるが、吉井は軽く身をかがめて避け、逆に木刀による一閃を放つ。
どうやらそれが利いたらしく、一気にライフを削りとられてお陀仏となった。
そしていつの間にかいた鉄人の『戦死者は補習ッ！』という言葉と共に相手は連行されていく。

「やるじゃねえか、吉井。動きは良かったぜ」
「伊達に観察処分者じゃないからね」

それは誇る所ではない筈だぞ、吉井。
吉井自身はまんざらではないようだが、やはり伊達に教師の雑用をこなしてはいなかったようだ。雑用をこなすことによって、召喚獣の扱い方を練習していたようだ。
そして戦いでは、点数では負けていたが技術でカバーする。これも立派な戦術だ。

「オラオラオラオラオラァ！」

承太郎も次々と相手を撃破していく。
今フィールドに張られている教科は国語であるが、実は承太郎は得意だったりする。剣をかわし、カウンターをぶち込んで周りの召喚獣を巻き添えにしてぶっ飛ばす。次々にリタイアしていく者が出た。
吉井もテクニックを駆使して承太郎ほどではないが確実に撃破していく。

そうしてここいらの敵を倒した時、丁度Ｆクラス本隊で代表の雄二達がやって来ていた。
雄二は今の状況を見てこう疑問を呈した。
「明久…まさか全部殺ったのか？」
「いやいや、承太郎君のおかげだよ。彼がいたから今、僕は生きている訳で」
雄二はなるほど、と頷く。
「空条、よくやったな。ありがとう」
「構わん。それより、今からどうするんだ？　今のＦクラスの戦力ではこれ以上減らす訳にはいかないが」
「確かに……仕方ない、Ｄクラスに突入するぞ」
雄二は手をふり上げ、皆もそれに倣う。勿論承太郎はそんな事はしないが。
雄二がＦクラスの全員にＤクラス本隊に突撃する事を伝え、いざ行かんとしていた時、どこからともなく土屋康太がその姿を現していた。コイツはまるでホル・ホースのような奴だな。
「Ｄクラスが教室前に籠城している。総力戦に持ち込む気」
「ムッツリーニ、よく報告してくれた！　あとで秀吉の写真を１ダース売ってくれ」
「…一枚百円」
「おいお前ら、今は戦争中だぞ！　集中しろよ！」
雄二の怒号がとび、素直に謝る２人。
戦争中でもこういったことを考えるのが凄い。

「ってえと、待ち伏せしているんだな？　土屋」
「……（こくり）」
「雄二、行くしかなさそうだぜ」
「わかってるが…」
「問題ねぇ、俺が全て片付ける」

俺はそう言ってすたすたと先頭を歩く。
その後ろから続々とFクラス生徒が連なっている。
吉井は承太郎の隣に来た。何か不安がっているようだ。

「心配はいらない。1秒もかからん」
「でも心配だよ！」
「信じないのか？」
「そうじゃないけど…」
『来たぞ！　バカのFクラスだ！』

その時、男の野太い声が響きわたる。
その声に反応し、Dクラスの生徒がこちらを見、召喚獣を展開した。
そして担当教員は総合教科のようだ。
Dクラスは宣戦すると、集団で走ってきた。
雄二はそれに身構え、出撃の命令を発する時に承太郎に遮られた。

「ここは俺しか出来ねぇ。下がってろ」
「空条、無茶だ！」
「やれやれ…この空条承太郎はいわゆる『不良』のレッテルを貼られている…。
ケンカの相手を必要以上にブチのめし未だ病院から出れねぇ奴もいる…。イバルだけで能なしなんで気合を入れてやった教師はもう2度と学校へ来ねぇ。
料金以下のマズいレストランには金を払わねーなんてしょっちゅう

よ」

承太郎は自身の召喚獣とスタンド、『スタープラチナ』を出現させる。
承太郎の周りの空気はピンと張った糸のように緊張していた。
前にいるDクラスを睨み付け、ポケットから手を出して帽子を被り直す。

「だが、守るべき…勝たなくてはならねぇモノは理解しているつもりだ。今！　それがFクラスだ。てめーらが触れてはならねぇモンだ…。だから」

『おれが裁く！』

承太郎は一気に地面を蹴り、走りだす。

「てめーら全員に、総合教科で戦ってやるぜ…『スタープラチナ・ザ・ワールド』！」

瞬間、この世界の時は止まった。

全ては動かない。唯一動くのを許可されているのは召喚獣と承太郎だけだ。
承太郎は相手の召喚獣に近付いた。

あと残り静止時間、５秒。

「やれやれだぜ」
『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラァッ！』

承太郎の召喚獣がオラオララッシュを繰り出し、相手の召喚獣をブチのめしていく。
まだここまで2秒しか経っていない。
残り3秒。
そのままラッシュを繰り出し、空中にぶっ飛ばした後、相手は静止する。
時が止まった中では、誰も視認することはない。一方的な蹂躙が出来る。
だからDIOは強かったわけだ。同じ能力がなければ死んでいたな。

『時は、動き出す』

ゆっくりと、全ては動き始める。
ラッシュによって全身を打たれた召喚獣は点数が尽きて零点になり、ぶっ飛ぶ召喚獣もいる。

『行くぞォォォ…って、あら?』

相手は異変に気付き始めたようだ。

『え!? いつの間にかやられてる!!』
『バカな…そんなはずが!』
『ハッ! 鉄人が…!』
『戦死者は補習ッ! さぁ来いッ!』
『何故にいいいい』
『嫌だ! 補習は嫌だぁぁぁぁ!』

…惨いな。

「く…空条！　今のはなんだ！？」

雄二が疑問を呈す。
やはり答えるべきだろうか？　それより理解されるだろうか。
花京院の気持ちが理解出来そうだ。

「雄二、気にするな。それより、次だぜ」

よく見ると、近衛隊に守られたDクラス代表の平賀がいた。
この戦争は代表を打ち倒すことで収束する規定になっており、雄二か平賀どちらかが戦死することによって終戦を迎えるわけだ。
だが、代表はクラスの中でも一番得点が高かった者が就任するため、集団ならともかく1対1の場合は下位クラスには勝機はない。

「Dクラス近衛隊隊長玉野美紀、試獣召喚」

その代表を守る近衛隊隊長が試獣召喚した。
そのなかで吉井は前に出た。

「おや、誰かと言えばバカ中のバカ、バカの代名詞『観察処分者』の吉井じゃないか」
「まあね。確かに僕は観察処分者さ」
「だったら惨めな戦いは止めたまえ。補習は嫌だろう？」
「確かに僕は君には叶わないよ。だから――」

平賀が吉井を挑発している。
だが、今の吉井では到底かなう相手ではないのは明白だ。
そして、何故か姫路瑞希が吉井の隣に立つ。

「姫路さん、よろしくね」

『何を言ってるんだ？』といった風に平賀は目をパチクリさせている。

「あ、あの…」

「あれ？　Ａクラスはこの廊下は通らないはずだけど――」

「その、Ｆクラス姫路瑞希、さ、サモンです」

瞬時にして召喚獣が姫路の傍らに立つ。

「え？　あ、はい」

平賀も戸惑いながらも相対させる。
姫路の召喚獣はどう見ても強そうだ。
バカデカい剣を持っているし、更には鎧も凄い。
デフォルトされていても十分強い感じは出ている。
多分これ以上は俺の出番は無さそうだ。

「やれやれだぜ」

その言葉を発した瞬間、平賀の『ウボァー』という叫びが聞こえてきた。

『ＦクラスＶＳＤクラス、勝者は…Ｆクラスゥゥゥゥー！』

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

決着ゥゥゥゥ（後書き）

最後らへんがおかしくなった。いつか書き直そう。
承太郎が時を止める場面もおかしいか。
作者はどうも第三者の視点で描くのが好き…というか自然にそうなる。すいません。

ラノベとかじゃなく、よくある推理小説とかＳＦ小説の作文が付いちまって…。読みづらいんですって。
だから第三者と当事者の視点が入り乱れてますんで、そこは許容してください。

問題、以下の問いに答えよ。

蝋燭が十本燃えていた。そこへ風が吹いて、二本は消えてしまった。また後で見に行くと更に一本消えていた。そのため、風の当たらぬように窓を閉めた。
それからは一本も消えなかったとして、最後まで残った蝋燭は何本か。

＞出典：頭の体操＜

戦後処理

次の問題に答えよ。

ある細胞が、一分経つと二個に分裂し、また一分経つとそのそれぞれが分裂し、合計四個になる。
こうして一個の細菌が瓶にいっぱいになるのに一時間かかるとする。
同じ細菌を、最初二個から始めると、瓶にいっぱいになるまで何分かかるか。

姫路瑞希の答え
『五十九分』

教師のコメント
『正解です。固定概念に捕らわれずに解けましたね。二個から始めると、最初の一分が短縮されるだけですね』

土屋康太の答え
『X分』

教師のコメント
『X分と答えた生徒は見たことがありません』

吉井明久の答え
『三十分』

教師のコメント
『まともな答えを書いてあってビックリしました』

◇

Dクラスを撃破した事実は、D・Fクラス両陣営に大きな衝撃をあたえたようだ。
ある者は感動して逆立ちしたり、あるものはその場にヨロヨロと泣き崩れている。
つまり、それだけ戦争がもたらした衝撃と後に残る戦後処理は凄まじいらしい。

「坂本、よくやったな」

一人の生徒が雄二の肩に手を置く。
ふと承太郎が雄二の方を見ると、F組の生徒に囲まれて賞賛の声を掛けられている姿があった。
雄二自身はそれが意外と恥ずかしいらしく、頭を掻きながら明後日の方を向いていた。

「でもな、誉めるなら空条だ。あいつが窮地を救ってくれたんだ」

そう言って、承太郎の下まで歩き、手を差し出してきた。

「ありがとう、だな。空条」
「ま、それは有り難く受け取ってやるぜ」

承太郎はその手を握りしめ、固く結んだ。こうしていると、やはりどこか気恥ずかしいと感じられるが、どことなく嬉しく感じられる。

「ま…まさか姫路さんがFクラスだとは…くふっ！」

真後ろで何かがぶっ倒れる音がした。
なんか微妙な感覚を受けながらも後ろに振り向けば、そこには討ち死にしたDクラス代表が血を吹きながら倒れていた。
…いや、あれは血糊だな。
『代表ォォォ！　死んじゃダメです！』
『玉野か…俺はダメだ。お前に、指揮権を…渡す、ぜ』
『じゃあ死ね』
『ぐふ…』

その会話をしてDクラス代表、平賀源二は血糊を吹いて逝った。
暫定的にクラス代表として指揮権を渡された玉野美紀がこちらに歩いてきた。

「坂本君、Dクラスは完璧にFクラスに負けを認めましょう。まさかAクラス並の生徒が二人もいるとは予想外でした」
「そうだろうな。空条の事は俺も予想外だ」
「そうですか…。では、Dクラス代表の代わりとして本題に入ります。クラス替えはいつにしますか？　返答次第では、準備する必要が――」
『だが断る』
「……え？」

全員が『マジかよ雄二』、という風な顔で雄二を見る。
その雄二の顔は、正に某有名漫画家のようだった。
雄二はビシッと指を刺すと、
「俺達はDクラスを奪う気はない」

それが当然、と言わんばかりに自信のある口調だった。
流石の俺でさえ彼の心情を理解がし難い。

「雄二、どういうこと？　Ｆクラスの設備と交換してやっとマトモな環境で勉強が出来るってのに」
「明久、俺達の目的はあくまでもＡクラスを倒すこと。俺達がＤクラスになって、それで満足したら意味がねぇんだよ」

打倒、Ａクラス。
それが俺達の到達すべき頂点、最終地点だ。
つまり雄二は背水の陣を仕掛けるのか。それならＦクラスより設備を下げることは出来ない訳で。

「俺達が要求したいのは、あの窓の所にあるＢクラスの室外機を破壊して欲しい」
「それだけ？」
「ああ、バレたら教師から睨まれるだろうが、Ｆクラスになるよりはマシじゃないか？　悪くはない取引だとは思うが」

悪くはないだろう。むしろ歓迎すべき取引だ。
これから三カ月、代表は蔑んだ目でみられるよりはマシだ。例え、それが今天国に逝った平賀だとしても。
つまり、Ｄクラスには『だが断る』という選択肢はないのだ。

「――いいでしょう。その取引、受けますわ。ですが、何故室外機を？」

確かにもっともな意見だ。打倒すべきはＡクラスだというのに、何故直接ダメージのない室外機を破壊する工作をする必要があるのだろうか？

「次のBクラス戦に必要だからな」
「……そうですか。我々も深くは追求は致しません。その提案は受けさせていただきます」
「タイミングに関しては随時知らせる。今日は行っていいぞ」
「ありがとうございます。我々はあなた方がAクラスに勝利する事を祈ってますわ」
「それは社交辞令か？」
「いいえ、本心から。少なくとも私の気持ちです」
そう言って暫定的Dクラス代表の玉野美紀は血糊を吐いて死んだ平賀源二をズルズル引きずって去っていった。…まるで死体を処理する様だな。シュールだ。
「おーい、明日はテストで点を補給するからちゃんと勉強するんだぞぉー！」
うぇーい、と皆がかったるいように口々に言い合い、教室に戻ってゆく。
「承太郎君、雄二。帰ろうか」
「そうだな」
俺自身は召喚獣を使って敵をボコボコにしたりしたが、実際はあまり疲れていない。
スタンドを常に出しながら戦っていた為に、集中力がかなり付いてしまって召喚獣を操るのは楽なもんだったからだ。あれぐらいならスタープラチナを操るほうがまだキツいだろう。
だが明日はテストがあるらしい。全く、厄介なものだ。

「テスト、か…どうしよう？」
「補給と言っても難しいからなぁ」
と、二人はぼやいていた。
「嫌か？」
「「当たり前」」
「やれやれ…だったら俺が教えてやるぜ」
「いいの？」
明久はその発言にビックリしているようだ。
雄二はそれほどでも無いらしいが。
「でも、どこで…」
「無論、俺の家で泊まりだぜ」
「本当か？　でも、いいのか？」
承太郎はその問いに構わない、と答えた。
戦争に勝つ為には基本的な戦力の増強が必要だ。それにはこの二人には強くなってもらいたい。
ちょうど家は屋敷だし、部屋は有り余っている。クラス全員が泊まりに来ても大丈夫な程だ。
「じゃあ行くぜ。他の奴も誘ってみるか」
「そうだな。そうしろ」
「あ…」
明久が鞄の中を探っているようだ。
何か忘れたのだろうか？
「教科書を卓袱台の下に忘れた…」

「「さっさと取って来やがれッ！！」」
「うぅ……。んじゃ、先に帰っててていいよ」
「それじゃ俺の家が分からんだろ。待っといてやるぜ」
「ごめん、すぐ戻る」

明久はぴゅーっと走りだした。
階段を上り、教室へ向かったのだろう。
それから約二分。

「ん、何をしておるのじゃ？」

秀吉だった。

「これから空条の家にいくんだ、秀吉も来ないか？」
「お、よいのか？　だったら行くぞぃ」
「一人増えたな。まぁいい」

それから四分後――

「あら、三人とも何やってんの？」

島田だった。

「わしらはコレから空条の家で泊まりで勉強するのじゃ。お主もどうじゃ？」
「あ～私はいいわ。またの機会に――」
「吉井も来るぜ」
「またの機会は今ね。家に電話するわ」
「二人…か。やれやれだぜ」

何故か島田まで付いてくるらしい。
吉井の話を出した途端、か。あながち予想は当たってるかもな。

それから三分後――

「お、土屋か」
「……（こくこく）」
「来るのか？」
「大体わかる」
「そうか」

それから二分後――

「ああ、遅れてゴメン…て、増えてない？」
「明久か。待っていたぜ」

やっと来たか。
八分経過だ。遅刻にも程があるぞ。

「あの、承太郎君…相談なんだけどさ」
「どうした？」
「あ、あの…空条君…」
明久の後ろから出てきたのは、姫路瑞希だった。
一体なぜ此処に？

「その、私も…泊めてくれませんか？」
「……勉強したいのか？」
「あ、はい！」

姫路はチラチラと明久を見ていた。

ほう…これはこれで面白そうだな。修羅場が見れそうだ。

「いいだろう。家の人には言っておけ」

「は、はい！」

そう言って俺達は集団で家に帰る。皆の行く道は空条家だ。

途中、明久に島田がドミネ・クオ・ヴァディスを掛けていたのは無視すべきか迷ったが、結局無視したのは記憶に新しい。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

戦後処理（後書き）

前回の答え

『三本』

最初に二本消え、また一本消える。
つまり三本。残りは燃え尽きてしまう。
簡単だったかな？

空条家にて（前書き）

この回は手抜き、と言われても仕方ないです。

空条家にて

Ｇｒａｖｉｔａｔｉｏｎ ｉｓ ｎｏｔ ｒｅｓｐｏｎｓｉｂｌｅ ｆｏｒ ｐｅｏｐｌｅ ｆａｌｌｉｎｇ ｉｎ ｌｏｖｅ．

―Ａｌｂｅｒｔ Ｅｉｎｓｔｅｉｎ

重力は、人間が恋に落ちるのには関係ない。

ｂｙアルバート・アインシュタイン

「ここだ」

歩いて数十分。俺達は家に着いた。

空条、と書かれた表札が古い歴史を感じさせる。

吉井達はそれをあんぐりと口を開けて見上げていた。無理もないだろう、初めて来る人間は大抵はそのような態度をとる。その反応は承太郎にとって既に馴れたものだった。

「行くぜ。荷物はもったか？」

「あるぞい」

秀吉が答える。

実は、家がある場所を教えた後に一度各個人で家に服を取りに戻ってもらっていたのだ。別に下着ぐらい貸してもいいのだが、生憎と承太郎が着る馬鹿デカいシャツしかない。

それに、女子の下着なんてあるわけがなかった。

それぞれが門をくぐる。
その先の庭はまた格別の景色だった。まず大きな池、鹿威し。これらは空条家の屋敷と正に調和しており、更に映えている。
吉井達はそれを見て更なる驚嘆の声を上げた。

「す……凄いわ…」
「正に『和』、という奴だな」

ここは正に屋敷、それも金持ちの…という認識を吉井達が抱くまでそう時間はかからなかった。
はっきり言って、大きすぎる屋敷は住みにくい。じじいがどこにいるか、母がどこにいるかなど、なかなかわからないのだ。
その屋敷の入り口である戸を承太郎は乱暴に開けた。

「あ、承太郎ー！　帰ったの？」

奥からドタバタと掛けてくる音が聞こえてくる。そして現れたのは、とても綺麗な女の人だった。
奥からいい匂いがするので晩飯の準備をしていたのだろうか。

「あら、承太郎のお友達ね？　転入早々友達を作るなんて、さすが承太郎ねぇ」
「えっと…空条君のお姉さん、ですか？」
島田が疑問を口にする。
やれやれ、ここに来た人間はいつもそう言う。困ったものだ。
と、承太郎の母――ホリィ・ジョースターはニヤリと笑った。

「残念〜、私はね…承太郎のお母さんよ！」
「「なんだってェェェー！」」

全員が見事にハモった。
いや、俺でも正直お袋は若いと常々思ってはいるが、そんな反応は初めてだ。
お袋はその反応が嬉しいのか、してやったりという顔をしていた。やっぱりこれ祖父譲りなんだろうか。

「空条さん、今日はお願いします！」
「あらあら、ゆっくり勉強していってね。多分パパも勉強を教えてくれるわ」

そういうと、ホリィ・ジョースターは一礼して元居た場所へ戻っていった。
…気のせいだろうか、土屋がやたらビックリしていたのが気になるな。

◇

「空条君のおじいちゃんって、やっぱり怖い？」

部屋に荷物を運び込んでいる最中、島田が言ってきた。
彼女曰わく、おじいちゃんって怖いのが普通らしい。

「いや、そんなことはねぇ。むしろ明るい」
「はぁ、良かった～」
「ただ筋肉がムキムキだがな」

承太郎の祖父ことジョセフ・ジョースターは筋肉がムキムキな人物で、とても頭の回転が早い。
かつて闘いの最中に敵をやたら欺いていたりと、じじい曰わくの武勇伝を良く聞かされた。

「それにしても、承太郎君のお母さんって綺麗だよね～。ビックリしちゃったよ。な、ムッツリーニ」
「…度肝を抜かれた」
「あれで４０歳だ」
「マジかよ！？」

ビックリし過ぎてモノも言えない、らしい。

◇

「飯前に勉強をする。そこに座っておけ」

俺は適当に横長の机を二個運び込み、吉井達をそこに座らせる。

「あ、明久の隣は私よ！」
「ダメです！　私が隣に座るんです！」

と、吉井を巡って言い争いになった。
やれやれ、正直こうなるのは見えていたんだが、こうも早く来るとはな。

「承太郎君…助けてよぉー、正直島田の隣だと生きてる気がしな痛い痛い痛い痛いィィィィ」
「姫路、島田。明久を挟んで座れ」
「そうね！　そうだわ！」
「名案ですね！」
「確かに姫路さんが横になったのは嬉し痛い痛い痛い痛い！　腕はそれ以上曲がらないィィィィィ」

島田が得意技、『ドミネ・クオ・ヴァディス』を明久にかける。
この技は島田が対明久用に開発した技らしく、最初の一撃『あなたは磔刑よ！』と叫びつつの攻撃、次に体のあらゆる急所に向かっての攻撃、最後に腕を限界まで曲げるという凶悪な技だ。よい子は真似しない。

「今日は一段と島田の技が輝いておるのぉ」
「明久が逝くのも時間の問題」

それは危ない。だが、止められない。
むしろ止めたらとばっちりが来るだろうな。

「…吉井は放っておくとして」
「酷いよ承太郎く痛い痛い痛い痛い」
「瑞希、そっちを持って！」
「は、はい！」
「せーの！」

『ザ・グレイトフル・デッド（偉大な死）』

――吉井明久の物語は此処で幕を閉じます。しかし！　この物語は吉井無しでも成立するので問題ありません――

「惨い！　僕は一応主役級だよ！　なにそのフラグ、まるで第一部で主人公が死んだ後のナレーションじゃないか！」
「――そして戦闘潮流、じゃな」
「違うって！」

◇

「今から英語を教える、承太郎の祖父のジョセフ・ジョースターじゃ。よろしくの」
ジョセフはニカッと白い歯を出して笑った。
実はこれからジョセフに英語を指導してもらうのだ。
ジョセフは日本語が無駄にペラペラなので難しい質問にも容易に答える事が出来るだろうという承太郎の判断だ。

「ジョースター…？　聞いたことあるな、確か…」
「うちのじじいは、ジョースター不動産の社長だ」

ふふぉ、と雄二は飲んでいたお茶を気管にぶち込む。

「マジで！？　世界的に有名なジョースター不動産の…社長だって？」
「いかにも、ジョースター不動産の社長じゃ。今は妻が仕切っているがの」
「おら、そんなことよりこのプリントを解けよ」

承太郎はどこからともなく数枚のプリントを一人一枚づつ手渡した。

問、以下の日本語を英語に訳せ。

『だが断る』

「だが断る・・・意外と難しいな」
「えっと…『Ｂｕｔ，ｒｅｆｕｓｅ』ですか？」
「正解じゃ。その他にも『Ｂｕｔ，ｒｅｊｅｃｔ』や『Ｂｕｔ　Ｉ　ｄｅｃｌｉｎｅ　ｉｔ』ということもできるの」

ジョセフは姫路を見て何故かニヤニヤしていた。
このじじいは何処か女好きな所があるが、どうしたものやら。

そして時間は刻々と進んでいった・・・。
（中略します。すいません。ｂｙ作者）

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

空条家にて（後書き）

テストで・・・善処いたします。

問題　以下の問いに答えよ。

『A町からB町へ９０分で行けた。
そして２回目も全く同じ方法、道のりで行ったのに今度は１時間半もかかってしまった。なぜだろうか？』

空条家にて2

Ｔｈｅｒｅ ｉｓ ｎｏ ｒｅｍｅｄｙ ｆｏｒ ｌｏｖｅ ｂｕｔ ｔｏ ｌｏｖｅ ｍｏｒｅ．
－Ｈｅｎｒｙ Ｄａｖｉｄ Ｔｈｏｒｅａｕ
愛に対する治療法は、更に愛する以外にはない。
ｂｙヘンリー・デイヴィッド・ソロー

「あ〜疲れだ〜」

今は既に十一時を回っている。
晩御飯を食べて風呂に入った後はずっと勉強漬けにしてやった。
明久は馴れていない勉強に疲れたのか、はたまた島田からの『パープル・ヘイズ』を食らったから疲れたのか、とにかくぐったりしていた。

「秀吉〜助けてよぉ」
「無理じゃ、諦めるんじゃな」
「そんな〜」
「なぁ空条、さっきから気になっているんだが…」
「どうした？」

雄二が指刺す先にあったのは、半裸の男の写真だった。その写真に写る男の首には星のアザがある。

「…これは」

承太郎は写真を手に取り、じっと見つめる。

数々の大切なモノを奪った男、幾多の時を超えて復活した男。
自ら石仮面を被って人間をやめ、先祖の肉体を乗っ取った男。
そして最後は俺が始末した。

男の名は…ＤＩＯ。

「こいつの事が知りたいか？」

雄二はああ、と頷いた。

「こいつの名はＤＩＯ、ついこの前死んだ人間だ」
「死んだって、そうか…」

まさか自分が殺害した、なんて言えるはずはない。というか言う気はさらさらない。
明久や土屋ならそこら辺は面白がるだろうがな。

「ちょっと危ない奴でな、宗教関係の事を研究していたんだ。天国とは何か、とかな」
「ははっ、確かに変な奴だな」

雄二はにっ、と笑う。

「シラケた話になったな。すまねぇ」
「いや、別にいいさ。勉強を教えてもらえただけでも十分だ」

雄二は窓の外に広がる星を眺めた。
ここから眺める星は、とても綺麗に輝き、血しぶきを放ち…ん？
血しぶきだと？

「む…ムッツリーニィィ！　しっかりしろぉぉぉー！」
「我が…人生に、一片の悔い、無し…がふっ」
「ムッツリーニィィィィー！」
「なぁ明久よ、そろそろ浴衣をちゃんと着てよいかのぉ…寒いのじゃが」
「あと十枚」
「復活はや！」

…後でその鼻血は拭いておけよ。

「おいおい、秀吉は女子だろ？　あんなに浴衣をはだけていいのか？」

すると、何故か雄二が不思議そうにこちらを見つめてきた。何かおかしかったか？

「……空条」
「ン？」
「……秀吉は男子だ」
「……！？」
「…一般的に言われる『男の娘』という奴だ。空条」
「や、やれやれだぜ。男の娘だとはな…」
「空条…びっくりしただろ」
「……正直、鳥が氷を吐くより驚いたな」

◇

今は十二時。よい子は寝る時間だ。
かと言って、思春期真っ盛りの少年達はまだまだそんな時刻には寝ることはない。

「ムッツリーニ、さっきの秀吉の写真をダース単位で売ってくれない？」
「…写真は一枚百円」
「わぁ、ありがとうムッツリーニ！」
「…背後に気をつけて」
「え、背後だって？　誰もいな――」
「――『キング・クリムゾン』っ！！」
「はっ！　いつの間にか島田がああああああ」
「よ、吉井君にはまだ早いです！　没収します！」
「んっがあああああ！！　そんなあああああ」

…とまぁ、こんな感じである。
ちなみに島田が発動した『キング・クリムゾン』は瞬間的に相手の背後を取り、そこへ首、胸、腹を順番に攻撃、怯んだ隙にマウントしてオラオラする凶悪無比の技だ。
そして姫路は明久が手にしていた秀吉の写真を没収するという強行に出た。もはや明久は踏んだり蹴ったりのポジションだ。

「はぁはぁ…吉井、これで懲りた？」
「な、なんに懲りたのさっ」
「そ、そりゃ…ゴニョゴニョ（他の人の写真を…）」
「え、なんだって？」
「あーも『ホワイトスネイク』っ」
「やめてぇぇぇぇ」

島田は更にギリギリと明久に攻撃を加える。
ちなみに『ホワイトスネイク』は、キンクリやドミネよりは威力は低い技だ。どうやら島田自身も疲れたのだろう。

「やれやれ、これじゃ眠れねーぜ」

そんな拷問紛いの光景に、承太郎が苦笑混じりに呟いた。
考えてみれば、今日出会って戦争をした。で、今に至る。とてつもない速さで友人が出来ていく。これには秀吉並みに驚きだ。

「ほらほら、さっさと寝ろよ。明日はテストだぞ」

雄二の言葉に我に帰った島田が明久に掛けていたホールドを解く。
どうでもいいが、女子に負ける男子はちょい悲しいモノを感じるぞ、明久。

「大丈夫ですか？　吉井君」
「あ、大丈夫だよ。まだギリギリ生きてる」
「それは大丈夫の範囲ではないと思うのじゃが…」
「……同意」

一斉に頷く。

「だから寝ろっての」

雄二の厳しい追求により、一同は解散と相成ったようだ。てか早く電気を消せ。
島田と姫路は名残惜しそうに明久の所を離れ、隣の部屋に移動した。
女子の部屋はこの男子部屋の隣に配置されていて、その気になれば自由に行き来出来る。
まぁ、公衆の面前もあるしあの二人が夜這いを掛けるとは考えづらい。俺もいるしな。

「んじゃ、電気を消すぞい」

秀吉がよいしょ、と言いながら電気を消す。承太郎はチラッと秀吉を見たが、やはり女の子に見えてしまう。別に恋愛感情とかそういった欺瞞の感情ではない。
かつて霧を操ることによって自身を美人に見せかけていた老婆や、肉を集めてポルナレフを騙そうとした女がいたが、そういった奴と同じだと納得した。

そして、夜はとっぷりと更けてゆく…

◇

朝。承太郎は何時も通りの五時半に起床した。
顔を洗い、自身のトレードマークである帽子を深めに被る。この帽子には手のひらの形をしたワッペンが貼り付けられていたりする。
そして次に『学ランとブレザーを見事に一体化した制服』を身に付ける。この制服はスピードワゴン財団が何故か支給してくれた制服で、学ランをベースにしている。普通は無い襟も完備だから鎖も自由につけたり出来た。

で、既に学校へ行く準備が出来た承太郎は暇潰しに音楽を聞いていた。

◇

「おはよー」
「ン、明久か。眠れたか？」
「バッチリさ。でも体中が痛いのはなんでかなぁ」

「……ま、頑張れ」

明久はやや眠そうに目をこする。
どうやら昨日の疲れが残っていたらしく、肩を回したりしていた。
原因は言わずもがな、島田だろう。

その後、姫路、島田、土屋、坂本、秀吉と続々と布団から抜け出してきていた。
全員揃ったところでホリィが作った朝食を採り、それぞれは学校へ行く準備をしていた。
その折にホリィが何かを一人づつ配っていた。

「はい、これはお弁当よ」
「あ、ありがとうございますぅ」

ホリィから手渡されたのは弁当だった。
紙パックに収められた弁当はまだ暖かく、作りたてだった。
もちろん全員はホリィに御礼を言った。

「よぉし、今日はテストだぁぁぁ！」

そう明久は叫びながら玄関を開けた。

「全く、大丈夫かしら？」
「さあな。今日次第だ」
「明久はいつも元気じゃのう。うらやましいわい」
「よ、吉井君！」

そんな時に姫路が明久の腕を組んだ。
なんというか、明久にとっての自殺行為を無意識に実行しているか

のようだ。恐るべし、姫路瑞希。
言うまでもなく島田は『ゴールド・エクスペリエンス』と叫びながら明久を襲った。
ちなみに『G・E』は、思いっきり顔をぶん殴る攻撃である。（※第五部、ジョルノVSブチャラティ）

「やれやれだぜ」

そんな微笑ましい（一部以外）光景を見て、平和を実感した承太郎だった。

◇

その頃―空港に、一人の男がこの日本に降り立った。
その男の髪型は物凄く奇妙なものだった。
『髪を縦に固めた髪型』と言えばつたわるだろう。
銀の戦車を持つ彼は、こう呟いた。

「日本はトイレが綺麗でいい国だなぁ～。さ、承太郎に会いに行くか！」

to be continued・・・

空条家にて2（後書き）

前回の答え

『別に間違いなんてない。違うのは時間の単位だけ』

ちと急過ぎたねぇ

屋上

あらゆる罪のうちで、最も悪いものは、人を分断する罪である。
嫉妬であり、恐怖であり、非難であり、敵対心であり、怒りである。
要するに、人への悪意である。
人の魂が、神や他者と愛で結ばれるのを阻む罪とは、こうしたことを言うのである。
ｂｙ　トルストイ

◇

「あ〜疲れた」

思わず机に突っ伏す。
とりあえず今日の四教科は沈めた。朝から島田さんの攻撃を受けていたから、体の節々が痛む。
これは僕、吉井明久自身が思うことだけど、島田さんはいずれ僕を殺すだろう。

「うむ。疲れたのう」

いつの間にか背後に秀吉が答える。
さて、今日の秀吉もめっさｃｕｔｅでｐｒｅｔｔｙなｇｉｒｌだね。
もはや芸術の域。
秀吉は今日は後ろに髪をまとめてポニーテール。髪型が変わると更に可愛く見えてしまうから驚きだ。

「あ、ムッツリーニ。どうだった？」

「……（グッ）」
「それはダメだったと思っても？」
「…構わない」

ダメじゃないか。
いや、ムッツリーニのことだ。恐らく保険体育は完璧のはず。抜け目ないなぁ。

「やれやれ、眠いな」

と、承太郎君があくびをかみ殺しながら言った。まぁ無理もない、昨日は僕らの為に勉強を教えてくれたからね。
承太郎は腕を回し、凝り固まった筋肉をほぐした。やはり疲れているのか。

「それより飯食おうぜ。屋上でな」
「あ、うん。じゃあ行こう」
「おっと、俺も行くぜ」

雄二が弁当片手に歩いてきた。その雄二からは殆ど疲労感が感じられないのはどうしてだろうか？　一度聞いてみたいものだ。
僕は鞄に入れていた承太郎君のお母さんが作ってくれた弁当を取り出した。
今日は久々にマトモな栄養が採れそうだ。最近は水と塩のみの生活というどこぞの修行僧もビックリの生活スタイル。よく生きてたな、自分。

「あら、吉井達はどこいくの？」

その時、島田さんが声を掛けてきた。

彼女も弁当片手に右往左往していた。
「今から屋上で食べるんだ、来る？」
「…まぁどうしてもってなら、良いけど。じゃ、先行ってて。瑞希を呼んでくるから」
「わかった」
そうして僕らは屋上へ向かった。

◇ＪｏＪｏ's ｂｉｚａｒｒｅ ａｄｖｅｎｔｕｒｅ

「おおお！！ うんまぁああい！」
「流石は空条のお母さんだな。冷めても旨い弁当を作るなんてな」
承太郎君のお母さんが作ってくれたお弁当は本当においしかった。
冷めても旨い、いや寧ろ冷ましたいぐらいだね。
弁当はあまり豪華ではないが、昼飯としてはかなり食べやすい。唐揚げや野菜炒めなどポピュラーなものが沢山入っている。
最近まともに栄養が取れていない僕としては大歓迎だ。
「これおいしー」
「凄いです…かなわないです」
女性にも好評のようだ。流石は承太郎君のお母さん、何でも出来るんだな。
その時、雄二は唐揚げを口に頬張りながら僕に言った。
「明久、午後は何があったっけ？」

「それぐらい覚えておきなよ。確か、試験召喚戦争の実習じゃなかった？」
「そうだった、すまない」
「確か実習にはフランスから招いた特別講師が来るらしいぞ。やはりフランス人なんじゃろか？」
「フランス人か…ちょいワルオヤジな人かなぁ」
「…明久、それはイタリアじゃ」

秀吉がツッコミを入れる。
今にも落ちてきそうな空の下で、僕達は昼飯を食べている。なんか解放的になったり、落ち着いたような気分になる。
イタリア人…じゃなかった、フランス人かぁ。どんな人なんだろ。

「フランス人…まさか」

承太郎君がいつになく強烈なオーラを発していた。ちょっと怖いくらいに。

「承太郎君？　どうしたの」
「ン？　なんでもねぇさ」

何か引っかかっているんだろうか？　フランス人になにか怨みでもあるんだろうか？
そう疑問に思いながらも僕はご飯を食べ終え、お茶をすすった。

「秀吉、そのフランス人は髪が縦に長くなかったか？」

承太郎が隣にいた秀吉に問う。
聞かれたほうも聞かれた方で若干萎縮しているようだった。

「髪が縦とは、お主もなかなか奇抜なことを気にするのぅ」
「いや、別にいい」
承太郎はどこか嫌な予感が背筋を這った。

◇

「いやーおいしかった！　これで数日は朝食が生理食塩水で過ごせるよ」
「明久、それで生きれるのは細胞だけじゃ…」
「え？　僕は細胞で出来てるんだよ秀吉。だったら生理食塩水だけで生きれられる筈じゃないのかい？」
「そ…それは…」

アホだコイツ、と雄二は心から思った。
ちなみに、点滴を打つと元気になるという話があるが、あれは間違いらしい。
実際は思い込みだそうだ。点滴を打つ、つまり体にいれるというなら血管に入れずに直接飲んでも効果は変わらないんだそうな。

「よ、吉井君！」
姫路さんが呼んでいるみたいだ。
はて、なにかやらかしたかなぁ、考えながら問いを返した。

「その…もし良ければ、明日お弁当を作って来ましょうか…？」
「えっと、お弁当を…だって！？」
「い、いえ、迷惑ならいいんですけど…」
「別に迷惑だなんて！　嬉しいよ僕は！！」
僕がそう言うと、姫路さんは途端に顔が赤くなる。

「じゃ、明日作って来ますね！」

と、天真爛漫な笑顔で言われた。多分僕の顔も少し赤くなってる気がする。

やっぱりこんな可愛い女の子から弁当を作ってもらうとか、フラグが立ったと見ていいんじゃね？　てか立ったんじゃね！？

「…ふん」

「え？　島田さん僕の腕を掴んで何するだーだだだだだだだ！」

「ウチの…ことを無視するなァー！　『ヘブンズ・ドアー』ッ！」

「うわあああ！　ポストを踏み越えて後ろを向くと魂が連れて行かれるゥ！」

島田の新たな技、その名も『ヘブンズ・ドアー』。

この技は相手の腕を掴んで後ろを振り向かせるだけのただの変哲もない技だが、技の本質は別にある。

それは…相手に幻覚を見せ、魂を連れて行かせると言うものだ。具体的には、『幽霊のいる道で、振り向いてはならない場所で振り向かせる』のだ。もちろん幻覚ではあるが、これは実際に持ってかれるらしい。

なんと恐ろしい技だ。

僕は魂が砕かれて持っていかれる寸前に気を失った。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

屋上（後書き）

次は『ありのまま』が出ます

ジャン＝ピエール・ポルナレフ

「やつを追う前に言っておくッ！　おれは今やつのスタンドをほんのちょっぴりだが体験した、い…いや…体験したというよりは全く理解を超えていたのだが…あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！

『おれはやつの前で階段を登っていたと思ったらいつのまにか降りていた』

な…何を言っているのかわからねーと思うがおれも何をされたのかわからなかった…頭がどうにかなりそうだった…催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…」

ｂｙＪ＝Ｐ・ポルナレフ

◇

午後。

承太郎達はテスト後だと言うのにわざわざ先生らに徴収されていた。

徴収とは言っても、これは試召戦争の実習らしいが。

「全くやる気が起きないって奴だぜ。帰りてぇ」

「まあまあ空条君、これも戦争の為ですよ」

そうボヤく俺にいきなり姫路が話かけてきた。

正直ちとびびったのだがそれを表情に表さない承太郎。凄い精神力である。

「戦争、か。姫路はやる気があるのか？」
「勿論です！　そ、それに…」
「吉井か」
「ち、違いますぅ！　私は…その…」

やはり図星か。姫路は前から吉井をチラチラと熱い視線を投げかけていたからな。吉井のどこに惚れたのか、とかは聞かないが。

「ま、頑張れよ。姫路」
「だから違います／／／」

そんな風な会話をしながらそのまま体育館まで移動した。

◇

場所は移り変わり、体育館。

「ふん、全員揃ったようだな。今から実習を開始する！」
鉄人が高らかに宣言する。
今日の鉄人は何時も通りの渋みの効いた声だ。あの声はもはや声優。
あまり乗り気ではなかったが、渋々この実習に参加していた。
本来ならサッサとサボって家に帰ったりしていたのだが、この文月学園に編入してからどうもサボれない。　正にやれやれ、という奴だ。

鉄人が長々と注意事項を演説している時、、１人の少年が手を挙げた。…吉井明久だ。

「鉄人、今日は何をするんですか？」
「…吉井、お前は俺の本名を知っているのか？」
「え？　鉄人は鉄人じゃないんですか？」
「……島田、やっていいぞ」
「分かりました。『マジシャンズ・レッドッ』！」
「え、ちょ痛だだだだだだ！　島田さん何を！？」

島田は吉井の背中をグリリィ、と曲げてゆき、確実にダメージを蓄積させている。あれはやられている奴にはかなりのダメージの筈だ。それが吉井と島田の関係なら容赦はない。

「さて、吉井は放っておくとして」
「ちょっと！　助け…」
「まだ動けたの…無駄無駄無駄無駄ァ！」
「ＧＹＡＡＡＡＡＡＡ！！」

男は、散る。それは花のように、されど海老のように。
そして島田のスカートの下を覗こうとしている少年。

「ったく…お前ら、そんなに補習がしたいか？」
「西村先生、今日は何するんですか？」

一瞬にして、全員が何事もなかったような顔で座っていた。
吉井と島田に関しては、超スピードや瞬間移動とかチャチなモンじゃない。もっと別の何かが働いたごとく、瞬間的にホールドを解いていた。

「…お前ら、そこだけは凄いんだな」
流石の鉄人でさえビックリしているようだ。
「話を戻す。今日は特別に、フランスから講師の方が来ている！」
周りは”フランス”という単語に反応してざわつき始めた。
その中で、一様にして嫌な予感がするのは俺だけだろうか…？
「おい鉄人、そのフランス人ってのは…」
「空条、貴様まで鉄人呼ばわりか！？」
「やかましい！！　はやくそいつの名前を言えッ！！」
「その必要はない、Ｍｒ．ニシムラ」
鉄人の後ろから出てきたのは――
「――我が名はジャン＝ピエール・ポルナレフ。承太郎、久しぶりだな」
ポルナレフだった。
◇
まさかのポルナレフの登場に一瞬言葉を失う。
何故、ポルナレフが此処にいるんだ？
「いや～ジョースターさんがな、ちょっと来いってうるさかったからよぉ～、わざわざ来てやったのさ承太郎」
「……嘘だな」
「本当だせ！　マジに言われたんだ」

あからさまな真意と嘘が混じってやがる。
「そうか、つまりテメーは講師として此処に来た訳だな？　じじいに言われてよぉ」
「Ｅｘａｃｔｌｙ」
ポルナレフがゆっくりと近付いてきた。そして不意に何かを叫んだ。
「ン！？」
瞬間に『世界システムフィールド』が展開され、体育館を覆い尽くした。
それは、教員のみが使うことが出来るフィールドだった。
「ポルナレフ、これは――」
「システムフィールドだ。これから実習するんだろう？」
ポルナレフは鉄人に話しかけた。
「そうだな…今から実習を開始するッ！！　ルールは簡単、自信のある者はポルナレフさんと戦うことだ！」
「「なんだってぇぇぇー！」」
「勿論模擬戦だから戦死することは無いが、一定以上のダメージを食らうと再起不能状態になり、そこで負けだ。わかったか！！」
あまりのムチャクチャ振りに皆が唖然としている。
そりゃそうだろう、いきなり講師と戦えと言われても無理だろう。
とりあえずポルナレフをぶん殴りたい気持ちを抑えておいて、この

後どうするか…

「よし、俺が行くよ！」

「吉井…マジか？」

吉井が名乗りを挙げるが、残念ながら俺の目には自殺しにいく未来しか見えない。

「止めておけ。奴は戦闘のエキスパートだ。素人が勝てる筈がない」

「はは！　僕は不可能を可能にする男だよ？　負けないさぁ」

「そうじゃのう…ここは明久に特攻隊長になってもらうかの」

「……それが最善」

…どうやら誰も勝てるなんて思って無さそうだ。

「じゃ、行ってくる！」

明久はそのままスタスタとポルナレフの所へと走って行った。

「多分今の”行ってくる”は”逝ってくる”になるんだろうな……」

雄二がポツリと漏らす。

何故だか知らんが俺もそんな気がしてきた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

ジャン＝ピエール・ポルナレフ（後書き）

途中まで書いていた文が消え失せ、やる気が出なかった。
すこし反省している

模擬戦（前書き）

二度寝落ちしました。
内容は意識が朦朧とした状態で描いてますんでご理解をお願いします

模擬戦

このＤＩＯを暗殺することはできん…
『ジョースター・エジプトツアー御一行様』はきさまにとどめを刺して全滅の最後というわけだな

ｂｙＤＩＯ

◇

ドドドドドドドドド

「Ｆクラス特攻隊長吉井明久、試獣召喚！」

僕の召喚獣が傍に立つ（ＳＴＡＮＤ　ＢＹ　ＭＥ）。何時も通りに木刀を眼前に構える。
これから模擬戦だけど、特攻隊長として格好いい所をみんなに見せ付けてやろう。

「よし、先ずは一人目だな。試獣召喚！」
そう言うとポルナレフの足元に魔法陣らしきモノが構築され、そして現れる一体の召喚獣…ん！？

「あれは…何？」

そこに立っていたのは、銀に煌めく騎士だった。
手に装備しているのはレイピアだろうか？　とにかくものすごく強

そうな召喚獣だ。

「ふーん、やっぱりシルバー・チャリオッツなのか…」

ポルナレフさんは自身の召喚獣をじと～っと見つめている。ポルナレフさん自身は見るからに召喚獣を出すのは初めてのようだ。つまり、戦いの経験ならこちらの方が上…？

「か…勝てるかも！」

「ねえよ」

あっさりと雄二に切り捨てられた。

でも、召喚獣を扱うスキルなら観察処分者の僕の方が上の筈！　ならば、先手を取るのみ！！

「てえい！」

召喚獣を操作してポルナレフさんの所に接近する。

走ってきたスピードを生かして、まだ突っ立っているポルナレフさんの召喚獣の足元にスライディングを掛ける。

「ム！」

その銀の光と共に召喚獣は派手に転んだ。受け身すら取っていない。

やはり僕の推理は当たっていたようだ。ポルナレフさんは戦闘に関して『ド素人』だ！

よし、そのまま追撃をする。

「行くよ！　無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ァ！」

倒れた召喚獣を木刀で一方的に殴っていく。
召喚獣の頭上に参考としての点数が表示さているなか、ポルナレフさんの点数が次々と減って行っている！

「勝てそうな気がするよ、雄二！」
「油断するんじゃない！　確実にダメージを与えていくんだ！」

わかっているさ。僕だってただの観察処分者では無いことを見せてやる！
それに、姫路さんや秀吉が見ているんだ。負ける訳にはいかない！

「追撃だ！　無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ァ！」
「ふーん、成る程。もう動かし方は大体覚えたぜ」

……なんだって！？
今……なんていったんだ？　『動かし方は大体覚えた』だって…？

「…ハッ　吉井、距離を取るんだ！　速く！」

瞬間、ポルナレフさんの召喚獣が妖しく動いた。

「行けッ！　シルバー・チャリオッツ！！」

ポルナレフさんの召喚獣が一気に動いたかと思うと、既に僕の召喚獣の真後ろに立っていた。

「行くぜ…オオオオオ！」

その手にあるレイピアが銀に煌めきながら動き、僕の召喚獣に迫る！
その時

ガキィン
と音がした。
「…島田さん！？」
「速くどいて！　危ないから！」
僕はそそくさとその場から待避した。
それにしても、何故島田さんが？
「レイピア相手なら、私の方が務まるでしょ？」
そういえば、島田さんの召喚獣はレイピアを装備していたんだった。
忘れてたよ。
「島田、余所見をする暇はねぇぞ！　逃げろ！」
承太郎君が思わず叫ぶ。
事実その通りで、島田は受け止めていた攻撃を耐えられなくなり、
防御は崩れた。
「島田さん！」
「今はウチに任せて」
「わかった。頑張ってね！」
「……そこは”僕も一緒に戦うよ”じゃないの？　あえて断るの
？」
「そりゃ、僕は観察処分者だしダメージは数割返ってくるしね！」
「…吉井」
「ん、なに？」

「血液型は何？」
確か僕は…って、それは輸血を想定しての事かな？　ちょっと怖いんだけど…
「話は済んだかい？」
ポルナレフさんは律儀にも待ってくれていた。意外といい人かもしれない。
「ええ。じゃ、行くわよ！」
島田さんは召喚獣をすぐさま走らせる。
デフォルメされている島田さんの召喚獣は意外と可愛いかもしれない。
ポルナレフさんは依然として余裕綽々としている。それが何時まで持つかな？
…でも、承太郎君の焦り様は意外だな。クールの代名詞の承太郎君が焦るなんて、明日は雪だったりして。
「ほらほらほらほらぁ！　遅いぜ！」
「く…強い！」
ポルナレフさんが意外なまでに押しているようだった。
よく見れば、ポルナレフさんのレイピアの動きが見切れない。なんてラッシュの速さだ…
「ポルナレフは、仇を討つ為に十年間修行したらしいからな。勝てる筈がねぇさ」

承太郎君は静かに言った。
島田さんは既に召喚獣の半分の点数を失っている。それも次々と。
やはりコレは危険なのかも知れない。

「ム！　隙ありィ！」

ポルポルの召喚獣はゆっくりと姿勢を低くし、一気に一閃した。

「え！？　キャアアアア！」

その一撃により、島田さんは葬られて『再起不能（リタイア）』となった。

やはり特別講師なだけに強いようだ。舐めてかかっていた。今は反省している。
しかし、島田さんも敗れ去ってしまったあのポルナレフさんを倒せるのか？

「俺が行くぜ」

承太郎が一歩足を踏み出した。
やっぱり無理だよ承太郎君！　相手はかなり強いんだって！

「やるかやらないかだ。試してみるという選択肢はねぇぜ」

承太郎は制服を翻し、ポルナレフの眼前に立った。

「一体承太郎はなにをする気なんじゃ？　流石の承太郎でも無理だと思うのじゃが……」
「……何か策がある」

「ムッツリーニ？」
「……承太郎は強い。それだけは確証がある」
ムッツリーニは承太郎に絶大な信頼を置いているようだ。何があって信頼を置いているのかは知らないが、ムッツリーニの情報は確証している。信じていいんだね？
「やれやれ、だぜ」
承太郎はポケットから手を出した。
遂に、承太郎対ポルナレフの闘いが始まる…！
『試獣召喚！！』
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

闘技・神砂嵐

「フン！くだらんなあ～～～～一対一の決闘なんてなあ～～～～～～っ
このカーズの目的はあくまでも『赤石』！　あくまでも『究極生物』になること！！
ワムウのような戦士になるつもりも無ければロマンチストでもない…
どんな手をつかおうが……最終的に…
勝てばよかろうなのだァァァァッ！！」

by　カーズ様

「やれやれ、テメーと戦うのはアヌビスの野郎以来だな」
「そういやそうだな。あの時はヤバかった…」

昔、ポルナレフはアヌビス神というスタンドに取り憑かれたことがある。
取り憑かれた理由はほんの些細なことだったのだが、結局は承太郎が勝利した。

「今回はスタンドを使わない方針で行くぜ。周りに迷惑がかけられねぇんでな」
「オーケー。よし、かかってきな承太郎」

お互いにズンと一歩を出す。
二人の距離は１０ｍｅｔｅｒ、どちらも射程圏に収めなければならない。

承太郎の召喚獣、スタープラチナが拳を握り締める。対するポルナレフのシルバー・チャリオッツも剣を構える。
ジョジョで言えば、ＤＩＯｖｓ承太郎の『ほほお～～～っ　では十分近づくがよい』辺りを参照。

『オラァ！』

先に先手を討ったのはスタープラチナだった。しかし、虚しくも両手の拳は空を切る。
ポルナレフのシルバー・チャリオッツは既に避けていた。

「今のは試し打ちだな。スタープラチナはもっと速い筈だろ？」
「そのとおりだぜ。しかしポルナレフ、テメーも先手を討つ気は無かっただろ？」

俺がポルナレフに感じたのは、先に攻撃する気がないということだ。先手を討つなら既に射程圏に入っている筈だからな。

「ありゃ、わかってたか？」

ポルナレフは意外な風に顔をしかめた。しかししかめたと言っても驚いた、と言った方が正しいか。

だがしかし！　既に水面下では戦闘は始まっていたのだ！

◇

『オラオラオラオラオラオラオラァ！』

スタープラチナの気合いの雄叫びが体育館に響き渡る。

Fクラス全員が、承太郎とポルナレフの闘いを見守っていた。
「ゆ、雄二…ハイレベル過ぎない？」
「正直展開が読めん…」
雄二はそう漏らす。
一体この人達はなんなんだ？　とFクラス全員が思った。
姫路や島田、ムッツリーニや秀吉までも容易に口を挟むことが出来ない。

「初めて空条とあってから気になっていたんだが…あの召喚獣は一体なんなんだ！？　俺達の召喚獣とは一線を越えている…」
『それについては俺が説明してやろう』
「て…鉄人！？」

明久の隣にいつの間にか鉄人がいた。
心境としてはビビりまくりだ。

「吉井、俺は西村先生と――」
「あの召喚獣は一体何なんですか？　明らかに特別製なんですが」
「――はぁ…あれは空条の精神が具現化したものだ。お前達、意味が分かるか？」
さっぱり、と首を振るFクラスの面々。
「バカ共が。いいか？　空条の精神は形を持っているという事だ。彼等はそれを『スタンド』と呼んでいる！」
「スタンド…」
雄二はその名を口にする。

「そう、スタンドだ。闘争本能によって操作出来る超能力と言ったら分かるか」
「ち、超能力…？」
「そうだ。そもそも試験召喚システムは別名『世界システム』という。これは擬似的にスタンドを生み出す為に開発したのだ」
「じゃあ俺達は自分の精神を使って戦っているのか？」
「そうだ。もっとも、吉井の召喚獣は特別にスタンドとほぼ同じだがな」

吉井の召喚獣はスタンドに限りなく近い。
モノに触れることが出来、ダメージも数割本体に伝わる。スタンドと召喚獣は言わば兄弟のようなものなのだ。

「空条の精神は確固たる形を持つ。だから召喚獣は空条の形を取る必要はないんだ。そしてポルナレフさんも同じだろう」
「……雄二、理解出来た？」
「わからん」
「だよね」

そして二人はゲンコツを鉄人から賜った。

◇

「ソラソラソラソラソラァ！！」

チャリオッツが本能的にレイピアを振り回す。
レイピアが空を斬る乾いた音が辺りに反響する。床に傷が付きながらもレイピアを振り回す。

油断したら直ぐに一刀両断される。
殺されはしないだろうが、その時点で自分の負けとなる。それだけは自分のプライドが許さなかった。

「くゥ、味のあることをしやがるぜ」

スタープラチナの拳でレイピアの攻撃を防ぐ。しかし刃物をぶん殴って止めている事には変わりはない。少しづつ、だが確実にダメージを食らっていた。

「こりゃヤバいかもな…」
「承太郎、負けたら豪華な飯奢れよ！」
「そいつは断るぜ。最低でも折半だ」

承太郎はそう冗談混じりに言った。

承太郎は召喚獣を踏み込ませ、今まで一定の間合いを保ってきたポルナレフのチャリオッツの懐に入った。

「な…！！」
「おっと逃がさねーぜ…オラオラオラオラオラオラッ！！」

光速を超えるラッシュを浴びせる。
チャリオッツは防ごうとレイピアを構えようとしたが、あと少し及ばず、ラッシュをモロに食らってしまった。

「ぐわあああ！」

そう言いながらぶっ飛ばされてゆくチャリオッツ。

「やれやれ、ポルナレフがまだ召喚獣の使い方に慣れてなかったから良かったものの…相手にしたくない奴だ」

召喚獣を自分の傍らに戻す。

ぶっ飛ばされたチャリオッツの頭上にある点数は――

「決着、か。承太郎にしてやられたぜ」

ポルナレフのチャリオッツの点数は零だった。ポルナレフは自嘲するようにニヤリと笑う。

『ま…まさか空条が…』

『流石空条！　俺達に出来ないことを平然とやってのける！　そこに痺れる憧れるゥゥ！』

『空条の勝ちじゃ…』

Fクラスの面々は目を丸くして承太郎を見ている。承太郎にとってその視線はあまり快いものでは無かったが、別に気にすることではないと思い、やれやれと呟いた。

「うお！？　可愛い女の子が居るじゃないか！！」

「お！？　ポルナレフさんどうしたのじゃ！」

で、ポルナレフはいつの間にか普通のポルナレフに戻っていて。

秀吉をナンパしていた…ナンパだろうな。

「俺の名前はジャン＝ピエール・ポルナレフ。軽くポルポルく～んとでも呼んでくれ。で、可愛い君の名前は？」

「わ、わしは木下秀吉…じゃ。し、しかしわしは男――」

「秀吉、かぁ。ボーイッシュだねぇ。君みたいに可愛い女の子は…

あのピンク色の髪の子しかいないなぁ」
はっ！　島田がポルナレフに向かい始めた！　しかも島田は完全にブチギレている！
「死ぬぞポルナレフ！　逃げるんだ！」
「へ？」
「……必殺闘技！『神砂嵐（かみずなあらし』ッ！！」
島田は腰を低く下ろし！　両手を前に突き出す！
左腕を関節ごと右回転！
右腕をひじの関節ごと左回転！
うっかり爆弾発言をしてしまったポルナレフは、島田の拳が一瞬巨大に見えるほどの回転圧力にはビビった！
「うおおおおああああ！！」
そのふたつの拳の間に生じる真空状態の圧倒的破壊空間は、まさに歯車的砂嵐の小宇宙！！
その全てを破壊しつくす風のうねりはポルナレフを襲うッ！！
「そして何で僕までェェェェ！！」
その絶対的な破壊空間は、ちょうど近くにいた明久までも巻き込む！
台風より強い風が真空までも孕んで二人を一度に攻撃する！！
「ぐあああああ！」
「骨がああああ腕がああああ」
周りにいた雄二でさえこの事態に目をつぶった！　友が死にゆく姿

を見たくなかったのだ。
ポルナレフの皮膚が裂けて血が飛び出してゆく！　顔面が変わるほどの圧倒的な風圧！
体育館の中は、まさに熱気が渦巻いていた！
――そして、風は止んだ。

「これが『神砂嵐』よ……」

その嵐の中で、儚い二つの命は消えた……。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

※もちろん全てイメージです。

闘技・神砂嵐（後書き）

惜しむらくは、戦闘シーンを削ってしまったことだ。

問、次の問題に答えよ。

『調理の為に火をかける鍋を制作する際、マグネシウムを選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この問題点と代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

カーズ様の答え

『問題点…いらぬジョジョの邪魔が入ったこと

合金例…エイジャの赤石』

教師のコメント

『エイジャの赤石は合金でしょうか？

光を集めてエネルギーを作る性質はマグネシウムより危険だと思います…』

吉良吉影の答え

『問題点…エコーズに邪魔されてガスに点火出来なかったこと。

合金例…バイツァ・ダスト』

教師のコメント

『点火出来ずに終わったことを嬉しく感じます』

ボスの答え

『今日のボス…マグネシウムと酸素の反応により死亡。

コメント…俺のそばに近付くなあああああ！！』

教師のコメント
『テストの最中に死なないでください』

プッチ神父の答え
『問題点…素数を数えて落ち着け。話はそれからだ。
合金例…隕石』

教師のコメント
『素数…ですか？』

ポルナレフの答え
『問題点…そもそも家がない。
合金例…まず、家を買うべし』

教師のコメント
『どうやって生活していたんですか！？』
大統領の答え
『問題点…別に鍋なんか作らないし、そもそも料理はしない
合金例…ダイヤモンド』

教師のコメント
『それを言っちゃダメです。しかもダイヤモンドは合金ではありません』

岸部露伴の答え
『問題点…あのクソッタレ仗助に邪魔された…いつか小指をもらってやる
合金例…ジュラルミン』

教師のコメント
『合金例だけが合っているのがなんだか腹立たしいです』

広瀬康一の答え
『問題点…ヤンデレな人を彼女にしてしまったこと
合金例…愛』

教師のコメント
『女性の髪の毛が付いていたのですが、どうしたのですか？』

ジョージ一世の答え
※ジョナサンの親父さん

『問題点…逆に考えるんだ、激しく反応したっていいじゃないか、
と考えるんだ
合金例…そのままでよし』

教師のコメント
『怪我するのでやめましょう』

とある道端の締固め用機械（ロードローラー）

「億泰よ…人は成長してこそ生きる価値ありと何度も言ったよなあ……
おまえの『ザ・ハンド』は恐ろしいスタンドだが…　おまえは無能だ！
無能なやつはそばの者の足をひっぱるとガキのころからくり返しくり返し言ったよなあ～～～
弟よ　おまえは…そのままくたばって当然と思っているよ！」

ｂｙ虹村形兆

―翌日、テスト後―

「ウボァー」

テスト終了。
昨日に引き続きテスト漬けの午前中だった。正直、この学校が百点満点の単位制の学校だったなら間違いなく進級が危ぶまれていたね。

「よ、明久」

僕に近付くのは雄二だった。
今日もワイルドというか野生というか…あ、どっちも同じか。

「雄二、どうしたの？　そんな切羽詰まったような顔してさ」
「……それが俺の普段の顔だ」

そうだっけ？　こりゃ失礼。

「そんなことより、テストはどうだった？　次の戦争には重要な事だぞ！」

「フッ…僕をナメないでくれるかい？」

「まさか良かったのか！？」

ちょっと違う。良かったんじゃないさ。

「赤点は確実に免れているハズ！」

「おい、誰かロードローラーを持ってきてくれ」

「やめてぇ！　今の僕にはあれを下からぶん殴って逃げる事なんて無理だよ！！」

なんかマジにロードローラーを持って来そうな勢いだったので、体を張って阻止した。ロードローラー。ダメ、絶対。

「テメーら、何をやってんだ？」

「あ、承太郎君～」

承太郎君はいつもながらの暑苦しいような、学ランと帽子を着用している。

承太郎君は僕らを見ながら呆れたように帽子の位地を直す。蒸れないのかな？

「く…空条！　ロードローラーを持ってきてくれ」

な…雄二、何を言ってくれるんだ！

「ロードローラーか。タンクローリーならイケるかも知れねぇぜ？

どーする？」

もっと凶悪なのが出てきたぁ！　しかもそれを安請け合いする承太郎君も凄いと思う！
しかもそれを使われると確実に死ぬよね！？

「んなもん持ってこねーよ。安心しろ」
「良かった～。まぁ、島田さんみたいな人が上から落として来そウリィィィィー！」

僕の腕が有り得ない角度に曲がっている！　いや…これは！！　島田さんの新しい技だ！

「これが…『ウェカピポ（ｗａｋｅ　ｕｐ　ｐｅｏｐｌｅ）』よ。吉井…」
「はッ…左半身が…」
「そう。私が『黄金の技術』によって作りだした、左半身を失調させる技よ。大丈夫、数分したら戻るわ」

ヤバい！　体が…半身が認識出来ない…！
島田さんは一体何をやったんだ！？　人間力学的にも無理がある気がする！　というよりそれはどこで身に付けたんだい！？

「さて、坂本君。あなたは吉井を抑えてて。私はヤるわ」
「了解だ」
「え？　ちょ、何を…」
「島田、テメーもなかなか鬼畜な野郎だな」
「褒め言葉として受け取っておくわ」
「一体何をするだあああああ！　答えてくれえええええええ！」

数分後、僕の左半身は通常どおり認識出来るようになりました。ですが、何故か殴られたような跡がある理由を教えてください。

◇

「次は命はないわよ」

はあはあ…やっと終わったか…
しかし…なんて恐ろしい子なんだ。男子より戦闘力が高いのはちょっと恐い。

「あ〝？」

なんて鋭い勘なんだ。ニュータイプか？
まあ一応は待ち望んでいた昼休みだ。まずは腹拵えをしなければ。
もっとも、僕は粗食だけど。

「よし、今日はいつもどおりリンゲル液を――」
「あ、あの。皆さん……」
姫路さんがもじもじとしてこちらに話しかけて来た。
僕としては、早くリンゲル液を摂取して細胞を甦らせないといけないのだけど…

「どうしたの？　姫路さん。あ、一緒に学食に行く？」
「い、いえ。その……お昼なら、昨日の…」
一体どうしたというんだろう。　昨日……？
「まさか、弁当か？」

「はい！　その…よかったらどうぞ！」

そう言いながら、後ろに隠していたバックを出してくる。

こ、これは…ファンタジーだ！　メルヘンだ！　二日間連続で弁当にありつけるなんて、僕の常識内では有り得ないよ！

「もちろん貰うよ。ありがとう、姫路さん」

「い、いえ…えへっ」

やっぱり姫路さんは可愛いな。胸も大きいし、スタイル抜群。島田とは…あれ？　左が真っ白く…？

「やれやれだわ。ド低脳って、こういうことを指すのかしら？」

そんな呟きが耳元から聞こえてくる。

ま、まさかさっきの『ウェカピポ』とかいう技を…！　し…死ぬかもしれない！

「ちょい待ちな。何も今殺すこたぁねえぜ」

そこで承太郎君がフォローに入る。

ありがとう承太郎君。君は最高に良い奴だ！

「後でじっくり、な」

修正。承太郎君は鬼畜です。

◇

「なんじゃ、何をしておるのじゃ？」
「あ、秀吉～」
承太郎君の後ろからひょこっと秀吉が出て来た。うん、今日も可愛いね。
「……わしは男じゃが」
頭を掻きながら秀吉はすぐさま訂正する。
僕としては完璧に女の子なんだけど。ま、いいか。
「今から姫路さんが作ってくれたお弁当をみんなで食べるんだ。もちろん秀吉も来るよね？」
「おお、そうじゃったか！　是非とも食べたいものじゃ」
こうして、仲間がまた一人増えた。
やはりこんな美人な人が作ったお弁当はみんな食べたいのだろう。
うん、分かるよその気持ち！
「だったら屋上へ行こーぜ。こんな不衛生な教室よりはマシだろう」
「うん、そうだね」
この男臭いこの教室で食べるより、青い空を見上げながら食べるほうがもっと美味しく感じられるだろう。
「そうか。なら先に行っててくれ」
「え？　雄二はどこか行くのかい？」
「飲み物でもな。暑いし」
「あ、それならウチも行く！　一人じゃ持ちきれないでしょ？」

意外だ。あの島田さんがこの心使い。はっ！　まさか飲み物に毒を混ぜて毒殺する気では！？

「…『女教皇（ハイプリエステス）』」

「やめて！　マジに冗談だから、冗談だからあああああ！！」

最近、僕の体は壊れそうです。

「ったく、いい？　今度言ったら天国行きのチケットをあげることになるからね！」

それはよくよく考えてみると、ぶっちゃけ『殺すぞゴラァ』的な意味だよね！？　遠まわしに表現しているだけで、次は殺すというメッセージだよねそれ！

そうして島田さんと雄二は財布をもって教室を出て行った。一応死なずに済んだけど。僕はそろそろ人間を超越できそうな気がする。

『あ～空条承太郎、空条承太郎』

その時、校内放送がスピーカーから発せられた。しかも呼び出しを喰らったのは承太郎君だ。

承太郎君はそのスピーカーを見上げた。

『じょーたろー！　一緒にメシ食おーぜー』

その声はポルナレフ先生だった。

「……悪い明久。先に行っててくれ。用事が出来た」
「あーうん、わかった」
「…メシに誘うのに校内放送するバカがいるとはな…」

承太郎君は呆れ顔で言った。そしてそのまま踵を返して職員室に向かっていった。
ポルナレフ先生は天然なのかな？　先生は無駄に日本語がペラペラなのが気になるけど。

「んじゃ、行こう」

僕らは屋上に向かって歩き出した。
もの凄く姫路さんの弁当が楽しみだ。この屋上に着くまでの時間が惜しく感じられるぐらいに。

だが…それが僕の、いや…僕らの盲信だった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

とある道端の締固め用機械（ロードローラー）（後書き）

承太郎が活躍出来てないけど、ご都合で。

ワムウッ！（前書き）

原作に忠実…だろう

ワムウッ！

「兄貴はよ…ああなって当然の男だ…まっとうに生きれるはずがねえ宿命だった…
でもよ…でも兄貴は最後にッ！　おれの兄貴は、最後の最後におれをかばってくれたよなあ～～っ
仗助～～見てただろォ～～～～～？」

ｂｙ虹村億泰

「天気が本当にいいね」
「そうじゃの」

ガチャンと扉を開けた先には、今にも落ちてきそうな空。これは弁当を食べるには最高だ。ビンを探している警官とか居なさそうだし。

「ビニールシートも敷きましょう」

姫路さんはバッグからビニールシートを取り出してコンクリートの上に敷く。
僕らはそれの上に乗っかる。

「やっぱりむさ苦しい教室よりは屋上だよね」
「……（Ｅｘａｃｔｌｙ）」

屋上には精神が入れ替わるような黄金の風が吹き、吸血鬼なら一瞬で消え去ってしまうような太陽の光が射している。これはかなり気持ちいい。

「じゃ、食べましょうか…」

そう言って姫路さんが取り出したのは重箱。流石姫路さん。僕の栄養不足なのを加味していてくれてこんなに多く作ってくれたんだね！　まぁ秀吉やムッツリーニがいるからその分少なくなるけど。

「おお…ブラボー」

蓋を取れば、なんとそこには素晴らしき料理の数々。色とりどりの野菜が並び、かつそれぞれがとても美味しそうに調理されている。やはり見た目がいいと中身も美味しいのは当たり前だろう。

「……（ひょい）」

「んな！？　いきなりのつまみ！？」

「気が早いのぅムッツリーニは」

ムッツリーニは重箱の中の一品を摘み、そのまま口に放り込んだ。確かエビフライかなんかだった。

「……！！」

ドドドドドドドドドド！！

ムッツリーニの目から光が失われていっていき、そして…倒れた。

「……！！」

僕らは何が起こったのか理解出来ない。いや、僕らの脳が見せている幻覚なのだろうか？　ムッツリーニがぶっ倒れて小刻みに震えている！

「む…ムッツリーニ？」
「……（無言）」
「ムッツリーニ…？」

ゆさゆさと揺さぶってみる。さっきから嫌な予感がしないのは気のせいか。
汗だくで土気色だ…。ムッツリーニの瞳も……どこを見ているのか……虚ろだ。
両腕もダラリとしたまま小刻みに震えているッ！

「……（ムクリ）」

ムッツリーニは起き上がった。

「……（スッ）」

ムッツリーニは懐から姫路や秀吉が撮られた写真を取り出した。そしてそのまま――

「はッ…マズい！　それ以上はやってはいかんのじゃあああああ！！」
「……（ググッ！）」

一流のスポーツ選手には『スイッチング・ウィンバック』と呼ばれる精神回復法がある！
選手が絶対的なピンチに追い込まれた時、それまでの試合結果にお

けるショックや失敗、恐怖をスイッチをひねるように心のスミに追いやって闘志だけを引き出す方法である。その時スポーツ選手は心のスイッチを切り替えるため、それぞれの儀式を行う。
『深呼吸をする』
『ユニフォームを替える』などである。

ショックが強いほど特別な儀式が必要となるが……！
『ムッツリーニのスイッチはッ！』

「ム…ムッツリーニィィィー！」
「……フンッ！（ビリィ！）」

ムッツリーニのスイッチング・ウィンバックは…自らの写真を破り捨てることだったのだ！

「……な…なまじ自らの欲望に従っていたから、料理の見た目に頼っていたから虚をつかれた…。これからはオゲェ！！」

ムッツリーニが再び地面に伏す。
こ…これは！　もしかして…もしかするんですかあああー！
秀吉はムッツリーニの耳に小さくしゃべりかけた。

（これ以上はしゃべるでない！　顔が真っ青じゃぞ！）
（ああ…時が見える…）
（待つんじゃ、まだ白い悪魔にコックピットを貫かれた訳じゃないのじゃぞ！）
（……）

――『寡黙なる性識者（ムッツリーニ）』は風になった――

ムッツリーニが最後に右手に掴んでいた写真は風と共に散ってゆく。
それはムッツリーニが生きた証であり人生であった。
涙は流さなかったが無言のムッツリの詩があった――
奇妙な友情があった――

『ムッツリーニ、死亡』

◇

「土屋君、どうしたんですかね…？」
「さ、さあ？　多分美味しさで『うっまああーい』ってなったんじゃない？」

ああ…恐ろしい。恐ろしすぎる！
ムッツリーニの最後の寡黙な態度から察して…ああ！　なんてこと！
『姫路さんは究極的に料理が下手』
ということがわかってしまった…！　このままでは…いずれムッツリーニの二の舞を踏むことになってしまう！

「いっぱい食べて下さいね！」

姫路さんが光の満ち溢れた笑顔で勧めてくる。
この笑顔を見ているとよし、何でも食べてやろう、という気持ちが湧き上がってくる。でも――

「どうしたんですか？　食べないんですか？」

――これから『死ぬ事より恐ろしい事が起こる』のは確定のようです。

（秀吉、僕は生き残れる自信は一切ない）
（偶然じゃの…わしもじゃ）
姫路さんに聞こえないレベルで秀吉と会話する。
（恐らく姫路自身も自らの料理を食べてみた事はないのじゃろう。調理実習の時はさぞかし地獄だったじゃろうな…）
（か…解決方法はないの？）
（……）
（秀吉！）
（仕方ない。ワシがいこう）
（だ、だめだよ秀吉！　あれは明らかにテトロドトキシン以上の毒性と青酸カリ並のショックがあるよ！）
（…無駄に毒物に詳しいの）
（まあね。とにかくあれは……）
（流石に加熱処理はされておるじゃろ。大丈夫じゃ。少量の毒物ならビクともせん）
無駄にタフだね。でもあの料理は明らかにテトロドトキシンと同等の麻痺を引き起こせると思う。確かテトロドトキシンは二十四時間以内に人を殺せるはずだけど。
しかしその時――
「お、弁当か。貰うぜ」
「これはあの姫路ちゃんの弁当か！」
承太郎君とポルナレフ先生登場。
「あっ、承太郎君！　ポルナレフ先生」

止めるのが間に合わず、２人は素手で口に放り込み、

パク　　メメタァ！　ドグシャァ！

ニメートル近い巨体は崩れ落ちた。

「じ、承太郎君！？　ポルナレフ先生！！」

ああ…そうか。姫路さんの料理はニメートル以上の体を簡単に麻痺させる事が出来る毒性があるのか…。ある意味これはバイオ兵器だ…。

僕は二人を抱きかかえながら空に浮かぶ雲を見た。

「こ…これは！」

――それは、天に登る二人の姿だった。

『あとは…頼んだぜ』

確かに、そう聞こえた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

ワムウッ！（後書き）

「カーズ！」
「エシディシ！」
「ワムウッ！」
「「「三人揃って！」」」

『究極戦隊、柱レンジャー！』

「…カーズ様、何故私どもはこの様な格好を？」
「何を言うかワムウ。我々は常に半裸、これぐらいの服装は恥とも思わん」
「そうだぜワムウ。楽しめばいいのだ」
「ハッ！　（楽しめって言ったって…）」

『究極戦隊、柱レンジャーは次週から放送開始！　彼等はエイジャの赤石を手に入れる為、向かってくる波紋戦士を皆殺しにしていく痛快ストーリー！』

邂逅

『思い込む』という事は何よりも『恐ろしい』ことだ…。
しかも、自分の能力や才能を優れたものと過信している時はさらに始末が悪い

ｂｙ吉良吉影

◇

「久しぶりだな、承太郎？」

真っ黒な空間から声が聞こえてくる。
誰だ？　俺の名を呼ぶのは…

「ン？　誰だ、と聞きたそうだな」
（ああ、テメーは…誰だ？）
「クックック…私はＤＩＯだ」
（Ｄ…ＤＩＯだと！？　バカな…テメーは俺が…）
「そう、貴様は確かに私を殺した。だが…現に此処にいるではないか？」

真っ黒な空間に響き渡る男の声。その声は色っぽくも艶やかな、そして柔らかく心の中に染み渡るような感覚にさえ覚えてしまう。ＤＩＯはゆっくりと、さも子供に言い聞かせるように柔らかく言葉を発する。

「理解せんか？　ここはあの世と呼ばれる場所だ」

（つまり…死んだのか？）

……信じられん。これは新手のスタンド使いの能力なのか？　とにかくこの場にいるのはマズい。

（ＤＩＯ、テメーはこれから何をする気だ？）

「心配するな。私は貴様に危害を加えることは出来ん」

（何故だ？）

「お前はまだ生きているからな。……いや、今はまだ臨死状態だが」

（つまり、今俺は死の淵にいるって訳か？　やれやれだぜ）

「とにかく…貴様は現世に戻らなくてはならんのだ。このＤＩＯと違ってな」

（そうか……。そう言えば、俺はどうやって死んだんだ？　俺は敵にもであっちゃいねぇぜ）

暗闇がうっすらと光が差してくる。その光と逆光を差している人影が一つ。

身長はニメートル近くあり、髪は長く髪にまで掛かっている。（第六部ｖｅｒ）　その姿は神々しくも何者をも近づけぬ威圧感を放っていた。

そいつの名は『ＤＩＯ』。俺が殺した。

「貴様の死因はな…その、玉子焼きだ」

そのＤＩＯから、最も似合わないであろう単語が飛び出してきた。

「姫路…とか言ったか？　とにかくそいつの作ってきた玉子焼きが貴様を殺したのだ。このＤＩＯでさえ玉子焼きは上手く作れるというのに…」

（……テメーの主食は血じゃなかったか？）
「フン、私だって、『えぷろん』なるものを着てアイスと共に料理をしたものよ！」
う…想像すら出来ねーぜ。
「とにかく、次からは姫路に気を付けることだな」
重々承知している。何回もＤＩＯに会いたくはないからな。例え、夢だとしても。
その時、承太郎の空間が輝きを増し、光で溢れた。
「フン、また会おう」
その言葉で、時は一巡した。

◇

「――くはっ！」
こ…ここは…。
（吉井！　承太郎が息を吹き返したぞい！）
（よ、良かった～！　完全に呼吸が止まっていたからね…）
なにやら明久と秀吉がひそひそと話をしている。
なんだ？　一体何をしているんだ？
「おい明久――」

（空条！　今は声を潜めるんじゃ！）
「……？」
「どうしたんですか？　何か気に入らない所でも――」
「ああ、いや…なにもないよ、姫路さん」

明久はマジにあたふたしてやがる。それに姫路から目をそらしているようだ。
おかしい…。姫路は別になにも感じてはいないみたいだが、この二人は何をしているんだ？

（――明久、さっきからおかしいぜ。何かあったのか？）

とりあえず場の空気を読み、ひそひそ声で話し始めた。

（実は、あの姫路さんが作ってくれた弁当についてなんだけど――）
（あれは…バイオ兵器じゃ！）

秀吉がふと目をそらした。その視線の先には――

（ポルナレフ…土屋…）

完全に逝ってしまった二人の死体があった。

（二人は食べたとたんにぶっ倒れて…）
（……そうか。あの弁当に、そんな威力があったとはな）
（そう言えば、空条はどうじゃったんじゃ？　みたところ平気そうじゃが）
（――死の淵まで行ったぜ）
（やっぱりの）

秀吉はうんうんと納得したように頷く。
承太郎はチラッと倒れている二人を見た。

（やれやれ、生き返らせるか）
（え？）

承太郎は姫路に怪しまれないように、まずポルナレフの肩を叩いた。
ジョセフがいたら『ノックしてもしも～し』と言っただろう。
瞬間、承太郎は『スタープラチナ』を出した。

（行くぜ…）
（空条？　一体なにを――）
（心マッサージをして心臓を動かす）
（そ…それは流石に無理じゃ！　もう…二人は…！）
（『無理』だと？　俺達は戦争で無理なことばかりしてきた…無理だとか無駄だとかいった言葉は聞きあきたし、俺たちには関係ねえ。やるかやらないか、だぜ）

スタープラチナの腕を『ドキュウウウン』とポルナレフと土屋の胸にぶち込む！
そしてそのまま直接心臓を刺激する！

（だ…だんだん肌の艶が良くなっていく！）
（これが先生の言っていた『スタンド』という奴なのじゃろうか……）

あっという間に血流が良くなり、肌がより艶やかなものとなってゆく。
そして――

「承太郎……ここは？」
「……」
「し…信じられん！　生き返った…二人が生き返ったのじゃああ！」
声を上げて喜ぶ秀吉。
そう、生き返ったのだ！　ポルナレフとムッツリーニは、死んだのに生き返ったのだ！
彼等はお互いの生還を讃え、より深く友情は深まっていった…。

◇

（今、俺に起こったことを言っておく！おれは今やつのスタンドをほんのちょっぴりだが体験した。い…いや…体験したというよりは全く理解を超えていたのだが…　あ…ありのまま　今起こった事を話すぜ！
『おれは姫路ちゃんの弁当をつまんで食べたらいつの間にか気を失っていた』
な…何を言っているのかわからねーと思うがおれも何をされたのかわからなかった…
頭がどうにかなりそうだった…
…催眠術だとか超マズいだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえもっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…）
ポルナレフは頭を抱えながらブルブルと震えている。どうやらポルナレフにとって強烈なダメージになったのだろう。
それにしても、問題は――
（この弁当をどう処理するか、じゃの）
それが最大の難関だった。

この重箱に納められた内容物は、明らかにスタンド攻撃よりヤバい。ディ・モールト（モノスゲー）ヤバい！　確実！　そうコーラを飲んだらゲップが出るっていうくらい確実に死ねる！

「どうしたんですか？　さっきから手を付けてないですけど……」
「ン、ああ…すまねぇな。あまりにウマそうなんでどこに手を付けたらいいか分からなかったんだ」
「大丈夫ですよ。沢山ありますから、片っ端から食べてくださいね！」

……いや、片っ端から食べたら死ぬって。確実に。

ゴゴゴゴゴゴゴ！　（擬音）

（やべぇな。軽く死ねるぜ）
（確かに…エンジン音だけを聞いてブルドーザーだと認識できるようにね…）

明久は箸を手に持っているが、明らかに震えている。額からは汗が噴き出し、目は動揺している。

（どおぉぉするんだよおおおー！）
（……食べて死ぬしかない）
（僕はまだ生きたいよ！？　まだ死ぬ気はないよ！？）
（大丈夫だ。承太郎が生き返らせてくれる……多分）
（先生今小さく『多分』って言いましたよね！　なんで多分なんですか！？）

刻一刻と時間は迫っている。このままでは姫路が怪しんでしまう！

……ん？　ちょっと待て……。

「姫路、とりあえず聞くが――」
「はい？　なんですか？」
「――自分の料理を、食ったことはあるか？」

そう、自分が料理が下手だと気づいているならばそもそも弁当なんて持って来ない筈だ。だが、現に姫路は持って来ている。つまり――

「いいえ、ありませんが……」
「一度も？　味見ぐらいは無いのか？」
「わ、私…最初は皆さんに食べて欲しいんです。だから味見は極力しないようにして――皆さんどうしたんですか？」

――そうか、理解した。

『姫路の心の優しさと気遣いが、今！　俺達を殺している！』

姫路、彼女こそ真の『邪悪』だ。彼女には『悪意』がない。
『悪意』……『悪意』には力が向かって来る。より強い力が『悪意』を必ず叩きにやって来る。
『悪意』はいつか消える。実に単純だ。
だが彼女は違う。

彼女には悪意もなければ悪い心もないし、誰にも迷惑なんてかけてないと思っている（はず）。

だが、それこそ悪より悪い『最悪』と呼ばれるものだ。

人を知らず知らずのうちに打ちのめしてしまう『真の邪悪』だ。

そして、俺達はいつか必ず…『再起不能』になるだろう。

しかし！　女神は我々を見捨てはしなかった！

「お、ウマそうな弁当だな。貰うぜ！」

そう、坂本雄二という、正に世紀末の救世主が現れたのだった！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

邂逅（後書き）

ネタに走り過ぎた。反省している。

カーズは天高く究極石仮面を被った！

『変身！』

仮面は血の代わりに太陽光を吸収！　仮面は光り輝いたァ！

ギュインギュインギュインギュイン！

カーズの体にプロテクトスーツに覆われる！

そう、これが！

『石仮面ライダーエイジャ！』

『石仮面ライダーエイジャは次週から放送開始ィィィーッ！　有名なシュトロハイムやエシディシ、ワムウも参戦するぞ！

さあ、カーズ様と一緒に敵を凪払っていこう！』

さぁ、お弁当を完食しよう！

「究極生物とはッ！
ひとつ　無敵なり！
ふたつ　決して老いたりせず！
みっつ　決して死ぬことはない！
よっつ　あらゆる生物の能力を兼ね揃え
しかも　その能力を上回る！
そして　その形はギリシアの彫刻のように美しさを基本形とする。」

byカーズの説明文

「お、ウマそうな弁当だな。貰うぜ！」

新たな犠牲者出現。

「ゆ…雄二！」

止める暇もなく雄二は素手で口に放り込む…いや、表現は間違えているね。僕らは『あえて』止めなかった。
だって――

パク　　ドッギャアアアン！　バキィ！　ガラガラガラ……

手に持っていたジュースの缶をぶちまけて倒れた。

――やはりか。

「坂本！？　ちょっと、どうしたの！？」
やや遅れてきた島田さんが雄二に駆け寄る。
多分無駄だろう、姫路さんの弁当は血管にテトロドトキシンを注入した時以上の速度で体中に麻痺が回っているはず。
「雄二…そこまで死にたかったのかい？」
彼の遺体の前で密かに呟く。
その時、雄二の死体がこちらを向いて小さく、弱々しく目で訴えた。
『毒を盛ったな』と。
あながち間違えてはいないかもしれない。
明らかに食中毒では済まなさそうな毒性はニメートル近くの巨体でさえ再起不能にしてしまうのだからね。
むしろ意識が完全に消えないだけでも感謝してほしい。ポルナレフ先生やムッツリーニは一度死んだのだから…。
『それは姫路さんの優しさだよ』
もちろん僕も目で問いを返す。
こういった意志疎通が出来るのも、雄二のつき合いが長いからこそ。
こういった時にはディ・モールト（モノスゲー）便利だ。
「大丈夫か、雄二？　脚でも攣ったのか？」
「ああ…ありがとう空条。ちょっと足が攣って……」
承太郎君も重々承知しているようで、サッと姫路さんに対する言い

訳を作る手伝いをしてくれる。

「最近運動が不足してんじゃねーか？」

「確かにそうじゃの。最近はあまり走っておらんからの」

「……（こくこく）」

ムッツリーニや秀吉が焦ってカバーしている。しかし焦っていても自然に、かつ冷静に世間話をするように！

「そう？坂本ってかなり鍛えられてる気がするんだけど」

「はは、何をいうんだ島田。空条や先生に比べたらまだまだ貧弱だよ」

「まぁ確かに…ね」

事情がわかっていない島田さんはディ・モールト不思議な顔をする。やはり危害が加わらないうちにリタイアしてもらうのがいいかもしれない。

もし島田さんが姫路さんの料理を食べて再起不能になってしまって、人口呼吸とかしたらすぐにロードローラーとか持ってこられたりとか、ウェカピポを使われたりしたら大変だし。

「あ、島田さん」

僕はさりげなく島田さんの座っている場所を指差し

「さっきまでボスの死体があったよ」

嘘だけど。

「えぇ！　ちょ、マジ！？　あのボスの！？」

「うん。早く手を洗って来たら？」
「ゴメン、そうするわ！」
そのままぴゅーっと駆け出していった。
ああ、ボスってのは最近確認されるようになったイタリア人の遺体のことで、毎回どこかに死体がある。でもすぐに消えてしまう為に調査が難しい未確認な物体。
ちなみに『ボス』っていうネーミングは、第一発見者が付けたあだ名。

まぁとにかく、女子が傷付く事態は避けられた訳で。
「意外と島田ちゃんも女らしいじゃないか？」
「ポルナレフ先生、島田さんはちゃんとした女の子ですよ」
「全くじゃの」
「え？　秀吉も女の子じゃなかった？」
「……（Ｅｘａｃｔｌｙ）」
仲良く男五人で朗らかに笑い合う。
だが、水面下では壮絶な作戦会議が行われていた！

◇

（どうするんだよ！　このままじゃ、僕達は――）
（まさに絶対絶命という奴じゃ…）
（一体姫路は料理にどんなアレンジを加えたんだよ…）
（とにかく、今は弁当を片付けることが先決だ。しかし、あれだけの量を処理する事は…出来るのか？）
（ま、姫路ちゃんの料理で死ねるなら本望だぜ）

（ほぉ～～ポルナレフッ！　次はテメェだぜ）
（待て、待つんだ承太郎！　今のは冗談だって！）
（じゃあ他に誰が逝くんだ？）
（そりゃ、俺以外の――）
（やれやれ…『スタープラチナ・ザ・ワールド』！　時は止まる…）

すべては止まる。ポルナレフも明久も秀吉も。顔を真っ青にしているムッツリーニと雄二も。
スタープラチナでそのまま弁当を持ち上げ――

（少々強引だが…オラァ！）

ポルナレフの口を上げて出来る限り突っ込む。致死量だろうが…なに、人間は簡単には死なん。

（チ…時間切れか。時は動き始める…）
（！？　んぐっ！　んんんん！？）

スタープラチナで咀嚼を手伝ってやる。苦しかろうが、便器でウ○コを舐めるよりはまだマシだろう。

（……ゴクリ）

どうやらなんとか飲み込んだようだ。そしてまた逝ったらしいので心マッサージを施しておく。
とにかく！　弁当は全て何とか処理した！
その事に、此処に集った男達は今にも落ちて来そうな空のように、なにかすがすがしい達成感のようなものを感じていた。

◇

「あら、早かったですね。それ程おいしかったですか？」
「…あ、ああ。特にポルナレフが凄い勢いでな」
当の本人のポルナレフ先生は遠くを見ていた。その燃え尽きたような姿は何かを悟った男の姿のようだ。
そんなポルナレフ先生が一言。
「……」
言えなかった。
とにかくこれで戦いは終わりだ。ポルナレフ先生は燃え尽きたようだが、現に生き残った事が重要なんだ。
ああ、素晴らしきものよ。
「ああ、そうでした！」
姫路さんは何かを思い出したようにポン、と手を打った。
一体姫路さんは何を思い付いたのだろうか？
「実は…デザートも作って来たんです」
……僕達は元々死ぬ予定だったのでしょうか？
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

さぁ、お弁当を完食しよう！（後書き）

キャラ崩壊が激しい。頑張ろう。

「カーズ様、こちらがメイド服でございます」
「ほう…メイド服か。良かろう」

ガサガサ

「どうだワムウ。似合っているだろう？」
「……！！」
「どうした？　何か言わぬか」
「お…お似合いで…ございます（笑いをこらえている）
「なるほど、確かに私はスタイルが抜群にいいからな。メイド服が似合わぬはずはないのだ」
「（筋肉が隆起し過ぎてメイド服が戦闘服に見えるというのは言ってはならない…絶対に！）」
「おいエシディシ、どうだ？　私の艶姿は」
「（はっ！　しま――）」
「カーズ…一度日本へ行け。秋葉に行ってくるんだ。まだ間に合う…」
「（エシディシ様！　ありがとうございます！）
「フーム…まだまだと言うことか…」

後―

「ワムウ…メチャ面白かったぜ！」
「（だよなぁ…）」

眠れる奴隷

「１９世紀！それは産業と貿易の発展が人々の生活と思想を変えた時代だッ！
依然！食糧不足や貧富の差が激しいにもかかわらず大人も子供も『自分もいつか金持ちと同じような暮らしができるッ』
このような幻想をいだいていたッ！
それは嵐のようなすさまじい乾きだったッ！」

『デザート』

この甘美な響きと涼しくなるようなイメージがある、素晴らしき言葉。しかもとても美味しく、失敗したとしても大抵は食べられる。
例えば『プリン』。
プリンは市販の物が一番美味しいのだが、自分で作るというのも味がある。僕も昔、中学の調理実習の時に作ってみたんだ。
焦げたりしたけれど、自分が作ったものはおいしかった。

――で、話は戻る。

（デザート…だって？）

ひ…姫路さんは僕らを毒殺する気なのか…！　しかし…あの純真無垢な笑顔はそんな邪悪な思想が読み取れない…！

（やはり…鬼だな）
（ポルナレフはダメか…なら、次は誰だ？）

（……降りさせてもらう）
（そうか。なら明久、頼む）
（嫌だよ！　僕はまだ死にたくない！　雄二が行けば良いじゃないか！！）
（ふ…む、確かに俺が言ったら株も上がるかもな…）
（え…！　じゃあ…！）
（だが断る）
（ナニッ！！）
（この坂本雄二が最も好きな事の一つは、自分が可愛いと思っているやつに『ＮＯ』と断ってやることだ…。さあ喰えッ！　明久ッ！　姫路のデザートを食べたら命は無いッ！　殺されろッ！）
（……！）

い…いくら雄二だからと言って…！　僕はみすみす命を捨てるような奴じゃない！

（『喰え』って言われてもねぇ～～～ッ　この僕が食べると思うのかい！！　食わせてやるよ。姫路さんの料理を！！）

ドドドドドド！
まさに一触即発。僕らはお互いをにらみ合って牽制した。
生きるか死ぬか。運命はこの戦いにかかっているんだ！抗ってやる！　姫路さんのデザートを食べるという運命に！　僕は今から運命を乗り越えてみせる！！

「あの、どうしたんですか？　にらみ合っちゃって…」
「ああ、ゴメンゴメン。ちょっと友情を確認していただけだよ、ね！　雄二！」

僕は敢えて雄二の名前を強調する。

「フッ…俺達は運命の赤い糸で結ばれているようだな」
勿論その赤い糸は血染めだよね。あからさまに戦いの運命を義務付けられた、男の糸。
「赤い糸…ですか？　ロマンチックですね！」
全くロマンチックではないですよ、姫路さん。これは血染めです。
「あ…ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ」
確かに、姫路さんが持っているディザートは、ヨーグルトと果物のミックスだ。箸ではいささか食べにくいだろう。
「取ってきますね」
スカートを翻し、廊下へと消えてゆく。つまり、これはチャンスだ。
◇
「やれやれ。で？　改めて誰が食べるんだ？」
「「もちろん！！」」
「明久だ」
「雄二だ」
「明久だ」
「雄二だ」
「明久だ」
『スタープラチナ・ザ・ワールド』

このまま言い争いが終わらなさそうだったから、時を止めた。
「やれやれ…二人が食べりゃいいじゃねえか」
そのまま明久の口を開けてデザートを流し込む。そして雄二も同じように流し込むッ！
無論、慈悲の心はない！
「む…少し余ったか？」
容器には少しだけ余ったデザート。ちょっと勿体無いと思う。
しかし、時を止める限界になってしまった。
『……時は動き出す』
「…！　むぐ！　ん？　意外とイケるあじグぺっ」
「いつの間に…ん？　意外とイケるあじグぺっ」
そのまま、二人の儚い命は無惨にも散って行った。
さて、姫路が帰ってくる前にこのバイオ兵器を片付けるか。
「空条。ワシが行こう」
男気溢れる言葉が秀吉から発せられる。しかし全く似合わないのは何故か。
「いいのか？　死ぬぜ」
「構わぬ。元々ワシの役目だったのじゃからな」
フッと不適な笑みが零れる。それはさも、自らの運命を知ったかのようで。

「流石に死ぬことはないじゃろう。心配するでないぞ」
その運命を諦めたかのようで。
今から死にに行く覚悟があるようで。
儚くて。

「秀吉…」
「それにの、空条。ワシは十分満足しておる。
明久達と楽しい一時を、学校生活を。何一つ後悔はしておらぬ」
秀吉は、その全てを受け入れていた。そう、自らの意志で。
これから儚いレクイエムが奏でられる。

「ワシらは皆、『運命』の奴隷なんじゃ。明久達がこれから歩む『苦難の道』には何か意味があるのかもしれん。
彼らの苦難が……どこかの誰かに希望として伝わっていくような何か大いなる意味となる始まりかもしれん…」

一陣の風が屋上の男達を吹き抜ける。
太陽は薄い雲に覆われて薄暗くなり、少し涼しくなる。秀吉は、どこか遠くを見ているようだった。

「無事を祈ってはやれんが、明久達が『眠れる奴隷』であることを祈ろう…。
目覚めることで…何か意味のあることを切り開いて行く『眠れる奴隷』であることを……」
運命は変えられない。だから乗り越えるしかない。
秀吉は、姫路が作ったデザートの入った容器を手に取り、ゆっくり

と一息をついた。
そして、容器を傾け、一気にかき込む。
「むぐむぐ。なんじゃ、意外と普通じゃとゴばぁっ！」
秀吉は全てを悟ったように、ゆっくりと落ちてゆく。意識は朦朧と消え去っていく。
その散り際に、秀吉は一言発した。
「気にするでない…。
そうなるべきだったところに…戻るだけじゃ。元に戻るだけ……ただ元に…」

木下秀吉
『再起不能』

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

眠れる奴隷（後書き）

秀吉、再起不能。

「ふはははは！！　ついに…ついに来たぞ！　秋葉原ァァ！」
「夜の秋葉原も面白いな。さてカーズ、何しに来たんだ？」
「あ、どうも。（カーズ、メイド喫茶のチラシをもらう）この国ではＭＯＥという文化がある。我々はそれを学ぶのだ」
「カーズ様…流石にそれは…」
「何を言うかワムウ。我々は学ばなければならん。常に学習よ」
「ああ。このエシディシもそれに同讃するぜ」
「…分かりました」
「フ…私は長門派だ」
「ほう、カーズも同じか？」
（ダメだ…我が主人達は完璧にオタクだ…！）
「ならば踊るぞ！　ＨＡＲＵＨＩ－ｄａｎｃｅを！」
「え！！」
「良かろう…カーズ！　ダンスは完璧か？」
「当たり前だ…ワムウッ！　とりあえずお前はこの動画を見ろ！」
「ははっ！　（やだもう…）」

数分後…

「いくぞ！　『ハレ晴れユカイ』だァァ！」

その後…

『筋肉ムチムチの男達が一心不乱にハルヒダンスを踊ってみた』と

いう題名でニコニコ、ようつべにアップしたところ…

『アクセス第1位』

コメントには、
『あの完璧で一寸の狂いもないダンスはどうやって踊るんだ！？』
『イケメン過ぎる！』
『ギリシア彫刻のようだ！』
と、大絶賛だった。

『次はらき☆すただ！』と、カーズは意気込んでいた。

今日、６月７日は荒木飛呂彦さんの５０歳の誕生日ィィィィ！！
おめでとうございます！！

作戦会議

「この岸辺露伴が金やチヤホヤされるためにマンガを描いていると思っていたのかァ――――ッ！！
ぼくは『読んでもらうため』にマンガを描いている！　『読んでもらうため』ただそれだけのためだ
単純なただひとつの理由だがそれ以外はどうでもいいのだ！」

ｂｙ岸辺露伴

◇

「生きてるか？　秀吉」
「ああ…何とかの」

とりあえず秀吉には沢山のお茶を渡しておく。なんでも、お茶は殺菌力が優れており、うがいに使えるそうだ。

（しっかし…よもや姫路が料理がダメとはのぅ…）
（確かにな。姫路は品性高潔でオールラウンドにこなせる万能だと思っていたんだが…まぁ仕方ないな）

小さな声でお互いを慰め合う。それ程姫路の料理は凄かったのだ。
いや、あれはスタンドなのかもしれない。

とりあえずはその思考を止め、改めて雄二に振り向き直った。

「改めて聞くぜ。次の戦争の相手はＢクラスで間違いないな？」
雄二はその問に対し、ゆっくり首を縦にふった。
「そうだ、空条。俺たちの次の目標はＢクラスだ」
「どうしてＢクラスなの？　目標はＡでしょう？」
「確かに、島田の言うとおりだ。しかし、その理由はある」
雄二は突然、神妙な顔つきになる。
「俺達は、このままでは確実にＡクラスには勝てん。いくら姫路や空条がいるからと言ってもな」
あながち、その論理は間違いではない。
まず、文月学園は天才からバカまで完璧にクラス分けがされている。その中でも特進コースに分類されるＡクラスは、正に特殊なのだ。特進…つまり、進学するため勉強をしまくるクラスだ。
単純に考えてみて欲しい。バカが天才に勝てるか？　Ａクラス的に言えば、『動物園の檻の中のネズミを怖がる子供がいるか？　いなァァァ～～いッ！』
「Ａクラスにとって、Ｆクラスという存在はアリも当然という訳だ。簡単に噛み砕いて言えばな」
「……悲しくなってきたよ」
「元気を出せ、明久。そこでこの坂本雄二は考える。『どうやったら上手く事を運べるか？』とな。正面突破か？　集団私刑か？　違う！」
雄二はグッと握り拳を作り、高らかに宣言した。

「一騎打ちだ」
「一騎打ち？　どうやってさ？」
「Ｂクラスを使う」

明久はあまり付いて行けていないようだ。ちなみに他のムッツリーニや島田も。

「俺があることを使って交渉する」
「あること…？」
「設備を交換する、というシステムだ。面倒この上ないが、今はこのシステムを使わせてもらうんだ」
「へぇ…」
「そこで、Ｂに勝っても設備の交換は行わずに協力関係を張るつもりだ」
「ふんふん、それで？」
「それを使ってＡクラスと交渉する。一騎打ちに誘導するんだ」
「なるほど」

確かにこれなら何とかイケる可能性はある。
集団で行っても結局は返り討ちにあうのは目に見えている。更に言えば、Ａクラス自体は戦争を望んではいないはずだ。なぜなら、彼らは既に生徒が目指すべき頂点におり、リスクを犯してまで戦う相手はいない。
もっと言えば、ＡクラスはＦクラスなんて眼中には無いだろう。

「無論、既に姫路と空条の事は知れ渡っているはずだ。そして対策もな」
「じゃあダメじゃないかー」
「いや、まだまだ策はある」

そう言い放つ雄二は、何故か自信に満ち溢れていた。

「ま、詳しい話は後々」

「僕が理解出来るかどうか怪しいけどね」

次の瞬間、雄二のパンチ（波紋疾走）が明久の頬にヒットしていた。

◇

「――で、空条」

「なんだ？」

雄二は真剣な眼差しでこちらを見てきた。ワイルドな顔付きはどこか荒々しさを感じさせる。

その鋭いキレ目が承太郎を覗く。

「この前から聞こうと思っていたんだが――」

「？　はっきりしねぇな」

「すまん。空条、お前って偶に俺達が認識出来ないような動きをするよなぁ。一体どうやってるんだ？」

「あ、僕も知りたい」

明久も便乗して来やがった。やれやれ…。

「なぁーに、少し動きが速いだけだ」

「いや、それだけじゃ説明出来ない。Ｄクラス戦の時のあの戦いは、とてもじゃないがスピードだけでは説明出来ない」

「……それに攻撃した瞬間が見えなかった」

ムッツリーニがボソッと言う。

ちなみに本当にボソッと言った。どうやらまだ気分が優れないらしい。

「いくらDクラスだからって、流石のAクラスでも一瞬で同時に点数をゼロにすることは出来るハズがないんだ。しかし空条はDクラスを一秒もかからずにねじ伏せた。つまり、何らかの外部要因があるはずなんだ…」

「確かに、承太郎君はあの時は凄かったよね～」

確かに、あながち間違いではない。

しかし、彼らにスタンドの事が理解できるはずがない。

花京院がそうだったように、スタンドの存在は同じスタンド使いにしか認識できやしない。そこが問題なんだ。

「もしかしたら…鉄人が言っていた『スタンド』って奴のせい？」

前言撤回。知ってやがったコイツ。

「……知っているのか？」

「まあね。だいたいは」

「どのくらいだ？」

「いや――あまり」

どうやら『スタンド』という概念しか理解出来ていないようだ。

まぁ俺が説明しても理解してもらえるかが問題だが。

「『スタンド』という概念は召還獣と大体同じだ。例えば…『召還する』という行為がスタンドを出す行為だ。攻撃してダメージを負うのもな」

「う…ん？」

「…やれやれ、ハッキリ言ってやるぜ。『スタンドは召還フィールドが無くても使える召還獣』と考えてくれ」

この説明ならわかってくれたようで、明久や島田はコクコクと頷いてくれた。

しかし、それでも納得いかないという顔をした奴もいた。

「じゃがの、空条。まだ説明にはなっとらんぞ」

「ああ、確かにな」

『スタンド…という概念は意外と古くからあるんだぜ。ムッシュ秀吉』

「はッ！　ポルナレフ先生！？」

ポルナレフがにゅっ、と秀吉の後ろから腕を回した。そしてそのまま抱き付くような格好になり――

『オラァ！！』

スタープラチナでぶん殴ってやった。

「…わかったか？　今のが『スタンド』と呼ばれるモノだ」

肝心の明久達は口をポカーンと開けたまま固まってしまっている。

「い…今どうやって先生をぶっ飛ばしたんだ！？　有り得ない…」

「有り得ねぇ、か。俺も最初はそう思ったモンだぜ。だが現に存在している。現実を直視しろ」

「いや、わかっているけど…」

明久は悩み続けた。

俺も悩むのは分かる。初めてスタープラチナが出現した時はマジに怖かったからな。

「ふ…む、『スタンド』というのはその…超能力の部類に入ると理解してよいのじゃな？」

さっきまで話を聞き続けていた秀吉が確認をする。

「それで構わねぇが…実はまだある」

『『なんだってェェェェ！？』』

ほぼ全員の声が重なった。

「俺は…『時を止める』ことが出来る」

『『な…なんだってェェェェ！？』』

再び全員の声が重なる。姫路ですら驚いている。それほど今の告白が衝撃的だったのだろう。

「そ…それは！？」

「どういう意味なんじゃ！？」

雄二と秀吉が身を乗り出して聞いてくる。

「簡単に言えば、俺は『時を五秒程停止』させることが出来る。もはやチートだな」

「……それはチートの範囲を軽く超えている気がするのじゃが」

「……同じく」

「空条、つまりそれを使ってDクラスをぶっ飛ばしたのか？　その…スタンドとは別の能力で？」

「違うな。『時を止める能力』はもともとスタンドの能力だ。俺はそれを『ザ・ワールド』と呼んでいる」
「『世界（ザ・ワールド）』、ですか？」
姫路はおずおずと言った。彼女ならすぐ理解してくれるだろう、と承太郎はそう思った。
「『時を止める』…ですか。それなら光や空気はどうしているんですか？」
「わからん。多分…太陽の動きと光、空気は止められないだろーぜ」
こればっかりは俺ですらわからない。
時を止めたとき、全てのモノは一旦動くことを止める。しかし、俺はその中を動くことができる。
だが、そうなるとあることが発生する。
空気も動くのを止めるのであれば、俺が動くことは不可能なのだ。
なぜなら、俺が動こうとすると、空気は固定され、動く前の場所に真空が出来る。
そこを埋める必要があるのだが、いかんせん空気は動くことはない。
つまり、俺の体が裂けるわけだ。
そして光。
これも固定されていれば、一歩歩くだけで真っ暗になってしまう。
恐らく、スタープラチナ・ザ・ワールドはそういった矛盾を解決している…と考えられる。俺にもよくわからんのだ。
「…そりゃすげーな。大した奴だ」

雄二は心底感心したように言った。

◇

「ン、そうだ！　いいことを思いついた！」

と、明久は頭に何かインスピレーションが来たように言った。ぶっちゃけ言えば、あまり期待はしていないのが本音だが。

「どうした明久？」

「あのさ、僕らの召喚獣にも名前を付けたらどうかな、って」

召喚獣に名前…か。いいかも知れないな。

「召喚獣に…か？」

「うん。ただ単に『僕の召喚獣』っていうのも素っ気ないからね。どうかな？」

「まぁ、吉井の言う通りかもね…」

島田もうんうんと頷いている。

ちなみに彼女は何も食べていない。その事で『スティッキィー・F』を明久に掛けていたのは必然だったのだろう。

「じゃあ俺は…『ＳＩＡＭ　ＳＨＡＤＥ』で」

「ちょ、雄二！　中二病臭くなってる！！」

「マジ？　好きなんだがなぁ…」

「……洋楽で」

そこでポツリと、まだまだ体調が回復していないムッツリーニが言

う。

「洋楽か…グループ名か曲名だな」

「えー、私洋楽あまり知らないのに……」

「あ、島田さんは決まっているよ」

「え？　格好いいわよね！？」

「気に入るかな…『Ａｎｔｈｒａｘ』はどう？」

「『Ａｎｔｈｒａｘ』…か。気に入ったわ」

恐らく明久は本当の意味を理解した上で付けたんだろうな。完全な当てつけだ。バレたらただじゃ済まないだろうなぁ。

「よし、俺はメタリカで『Ｍｙ　Ａｐｏｃａｌｙｐｓｅ』だ。明久は？」

「う～ん…決めた。『Ｏｒｄｉｎａｒｙ　Ｗｏｒｌｄ』で！」

「お前らは洋楽には詳しいのか？」

意外に洋楽の名前が挙がることに少し驚いてしまい、ついついそんな疑問が口から漏れた。

そりゃ、バカのＦクラスが洋楽を嗜む様子が想像出来なかったからだ。

「え？　普通に聞くよ。邦楽より洋楽の方が格好いいしね」

「ほう？　意外だな」

明久は意外と洋楽は好きなようだ。

俺は親がミュージシャンをやっているせいでプリンスやＱｕｅｅｎをよく聞いていた。ジジイもＧｅｔ　Ｂａｃｋを聞いていたな。

「じゃ、ワシは…『Ｂａｄ』なんてのはどうじゃ？」

「それはダメ、絶対」
「…酷いのう。じゃあ『Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｉｔ』で手を打とうとするかの～」
秀吉にはちょっと悪いが、Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｉｔで決定だ。
なぜなら、秀吉に『Ｂａｄ』なんてイメージが無いからな。

「じゃ、私は…その、『ＥＹＥＳ　ＯＮ　ＭＥ』なんてのは…どうですか？　吉井君？」
「え？　ああ、姫路さんのイメージにとても似合っていると思うよ」
「あ…ありがとうございます！」

姫路は、今とても顔が赤くなっている。明久の目を直視出来ないほどだ。
それに気付かない明久も明久で罪作りな男だな。

「残るはムッツリーニか…」
「心配はいらない」
「え？」
「……『ＡＬＦＩＥ』。それが俺の召喚獣の名だ」

格好よくキメるムッツリーニ。
そのキメ方がかなり上手かった。シャイながらも静かに、ゆっくりと。
しかし、彼自身は無理をしていたようで、そのままひょろひょろとコンクリートに力無く伏した。どれだけ姫路の弁当が当たったんだ、土屋よ。

◇

「これで全員決まったな。じゃ、明久。頼んだぜ」
「え？　何を？」
「決まっている。Ｂクラスへ宣戦布告だ」
「だが断る。雄二が行けばいいじゃないか」

すぐさま断る明久。

「やれやれ、それならジャンケンで勝負だ」
「ジャンケン…だと？」

その宣戦布告をジャンケンで決めるというのは、チト問題がある気がするが…どうなのだろうか？

そして、遂に究極の『ジャンケン』勝負が始まる！！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

ジャンケン勝負

『このぼくの精神が…あんたの命令で左右されるぐらいならッ！
こうやって死んだ方がましだッ！』
『いいねえ～～～っ！　気に入ったぞ小僧！　ぼくはそういうまるで”劇画”っていうような根性を持ってるヤツにグッとくるんだ』

ｂｙジャンケン小僧＋岸辺露伴

◇

屋上には、とても冷たい風が吹き込んでいた。そして太陽光の光は雲に遮られ、日陰が僕らを包んでいた。

「ジャンケンだって？」
「ああ。ジャンケンだ」

雄二は、さも当たり前のように答えた。
僕的には全く構わない。だが、少し変ではないか？　宣戦布告に行かせる為の決闘ならいくらでも方法があると思うんだけど。

「簡単に事を済ませるにはジャンケンが手っ取り早い。しかも、負けた側は文句が言えないからな」
「へぇ…じゃあ雄二はジャンケンで勝てると思っているの？　僕は強いよ？」

「生憎と俺はジャンケンには強くてな。コテンパンにブチのめしてやるぜ…明久！」
「フン…良かろう、やってみろ。この僕に対して！」

ルールを説明する！

1、五回勝負
2、負けた場合、宣戦布告に行く。

「ルールはこれで良いのかの？」
「うん、ありがとう秀吉。愛してる」
「吉井ぃ～後で首を折ってあげる」
「私も参加しますね！」

やや怖い人たちが僕に殺気の目線を送りつけてくる。やだ怖い。特に島田さんが。
とにかく、僕はこのジャンケン勝負に勝たなくてはならない。どんな犠牲を払ってでも、僕は宣戦布告をしたくはないんだ！

「行くぞ明久ァ！」
『グッド！』

◇ラウンド1、ｆｉｇｈｔ！

「いくよ！　『ジャアーーーンケン！』」
「「ホイ！」」

明久…チョキ
雄二…グー

「あっ！」

なんてことだ…！！　この僕が、負けただなんて…。
対して、勝った雄二はまさにほくそ笑んでいた。その笑顔が最高にムカつくぐらいに。

「ん～～～っ？　明久、お前は口だけなのか？」

雄二は見下したような言葉使いで僕を陵辱する。ああムカつく！
とにかく、まだまだ先はある。ゆっくり確実に行くべきだな。

「しっかし…どこかで見覚えのあるシーンじゃのう…」
「……ボーイ・？・マン」
「おお、それじゃ。すまぬなムッツリーニよ」
「……照れる」

ああ、あっちで秀吉といちゃいちゃしているムッツリーニがとてもうらやましい。
対して僕は雄二との戦い。そして戦いが終わった後には首を折られる運命が待っている。

あれ？　おかしくない…？

僕が勝っても島田さんに首を折られるんだから……ん？

……。

……。
…。

「雄二、さよなら…」
「ん！？　どうしたんだ！？」
「いや、もうすぐで命が儚く散っていくと思ってさ…」

どうせ僕は捨て駒にしかならない、観察処分者なんだ。負けたってBクラスにボコされるのは見えているし、勝ったとしても島田さんと姫路さんのタッグ攻撃が待ち構えている。まぁ、何故島田さんと姫路さんが僕を執拗に攻撃するのかはサッパリだけど。

「全く…島田、姫路。ちょっとこっちこい」
「え？　なに？」

雄二は二人を呼んで、二人に耳打ちしているようだ。
で、直後に姫路さんの顔が赤くなって頷いている。一体雄二は何を話しているんだろうか。

「二人とも、どうしたの？　顔が赤いけど…」
「あ、いや…その、吉井君にもそんな頃があったなんて…」
「あーも！　吉井、後で待ってなさいよ！」

そのあまりの迫力に、僕はついつい三度ほど頷いてしまう。けど、島田さんも何故か顔が赤かった。なんで？

「明久、お前の運命は回避されたぞ。ジャンケンを再開するぜ！」
「あ、うん！」

一理末の不安と疑問は残るけど、とりあえずは『ジャンケン勝負』に勝たなくてはならない。それが僕の宿命ならば、受けて立ってやるさ！　今から僕は、自らの力を解き放つ！

◇ラウンド2、ｆｉｇｈｔ！

「行くぞ！　明久ァァァーッ！」
「かかってこいオラァァァァーッ！」

僕ら二人はお互いの目を見つめ、激しく牽制し合い、次に何を出すかを考える。
そして、一気に足を踏ん張り、気合いの雄叫びを高らかに叫んだ！

「「うおおおおーーッ！」」

身を低く保ちつつ、ピッチャーなボールを投げる時のような集中力を込め、渾身の一撃をぶつけ合う！
あと出しはその場で負け、あいこは決着が着くまで勝負し続けるゥッ！

『ジャァあああ～～んけん』

二人は一気にお互いの拳を前に突き出す！

『ホイッ』

雄二…パー
吉井…グー

「あッ！」
「や…やったぞッ！　勝った！」
ま…まただ！　また負けてしまった…　そんなバカな…！
このままでは、Ｂクラスに宣戦布告をしに行かなくてはならなくなってしまうじゃないか…！　ヤバいぞ…。
「勝ったな…ハッハッハ！」
「に…二回連続で負けてしまった…。負けた…ちぃ～～ッ」
悔しがる吉井明久はその時、奇妙な高揚感を感じた。
吉井はその時、汗をかいていた。一般的にいう、冷や汗とはまた別の、真剣勝負にでる闘いの汗だ。
吉井から出たその汗はゆっくりと制服に浸透し、その無臭な臭いは嗅いだ人間のアドレナリンを多量に分泌させ、一種のコンバットハイ状態にさせる。
対する雄二も同じように汗をかいていた。
「はあ…はあ…あと、少しで…勝てる！」
雄二はそう言った。
確かに僕はこのまま行けば負けるかもしれない。でも、今の僕は全く負ける気がしない…。
何故だろうか、さっきから僕は奇妙な高揚感を感じてしまっている。
体中の筋肉が、骨が、魂が、高揚している。
今なら奇妙な確信を持って言える。
「勝てる…」
僕の中では、その言葉が反響し、自信が満ち溢れてくる。心臓はよ

り速く脈動して血液の流れは速くなり、より一層頭に血が登って冴えるのが実感出来た。
アドレナリンも更に分泌されてよりコンバットハイは高まってゆく。

「どうだ、明久。俺はあと一回で勝利出来る！　対する貴様はどうだ？　ふはははは！」
「そうだね、確かに君はあと一回で勝てる。だけど……君は次は負けるさ」
「フン、大した自信じゃないか。無駄な期待だな。そんなものを持たない方がいいぜ」
「さあ？　やって見なくちゃわからないよ？」

雄二も興奮は高まっているのだろう、いつもの冷静な口振りとはかけ離れている。
恐らく雄二自身もこの闘いを楽しんでいるに違いない。
だけど。

勝つのは僕だ！！

「完全なる勝利を……掴む！」
「まだ…負けとは決まっていない…！　雄二！　これから貴様を…倒す！」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

ジャンケン勝負（後書き）

犬が西向きゃあああああああッ！！！！！
尾は東ィィィィィィィィィッ！！！！！！！！！

ジャンケンの戦い（前書き）

最初に言わせてください。
『読者！　この小説を見ているな！』

ジャンケンの戦い

もう一度…あの頃に帰りたい。
初めて友達が出来た、あの頃の春。
友達と泥だらけになって駆けた夏。
紅葉が色を付け始めたあの時の秋。
雪が燦々と降り積もっていた、冬。

二度と、少年の頃の感情は得られない今だからこそ。
もう一度…あの頃に帰りたい。
もう一度、たった一度でいいから。

ｂｙＥＸＤＥＡＴＨ（作者）

◇

時が経つのは早いもので、あっと言う間に去って行くものだ。
今、藍より青い空の下でまさに、熱い闘いが繰り広げていた。

「雄二…やはり僕は君と闘う運命にあったのかも知れないね」

観察処分者こと――吉井明久は、ゆっくり、ゆっくりと呼吸を整えていた。
心臓は絶え間なく振動し、全身に血を巡らせようと、より一層の働きをしている。自分の心臓の動きが知覚出来る程だ。

「俺も同じように考えていた」

彼もまた、自分と同じ状態であると明久は思った。
雄二はその特徴な猛禽類のような眼差しを常に吉井に当てている。そのうち捕って喰われるんじゃないかと思わせるような感覚に襲われるようなキツい眼差しだ。
明久はそう考えながらも、次に出すべき手を考えていた。

（このまま行けば確実に負ける。今雄二が二勝で僕が零勝…。依然流れは雄二にある訳か）

周りではムッツリーニや秀吉達が固唾を飲んで見守っている。姫路さんに至っては両手を胸の前で組んでいる程だ。
僕はそれをちょっぴり嬉しく思った。祈っている相手はどうであれ、確かにどちらかが勝つように祈っているに違いないからだ。
そして明久はすぐさまその思考を捨て去った。次に雄二が繰り出す一手を予測し、それに対応し、勝利する更に上の一手をこちらが繰り出さなければならないのだ。
裏をかき、心理を見抜く。

「明久、決めたか？」
「ああ、もちろんさ。これで君の運は僕のほうへ移る」
「フン、言ってろ。行くぞ！」
『ジャアアア～～～～ンケン！』

☆

「「ポンッ！」」

雄二…グー
明久…パー

「勝ったぞ……」

勝敗は完全に決まった。
雄二はグーを出し、僕はパーを出していた。つまり、僕の勝利である。

「勝った…遂に勝った！　これで一勝二敗だァ！」

よ…よし、ひとまず一勝したぞ…。
しかし、依然明久が劣勢にあるのは変わりはない。
雄二はそのまま自分の出した拳を見つめていたが、そのままその拳を更に握りしめた。

「まさか…俺が負けるだなんて……」
「そうだよ。君は負けたんだぜ。君の握りしめた拳がね」
「そうか。そりゃあ最もだな…フフフ…」
「何を笑っているんだい、雄二？」

突然雄二が冷ややかに笑い出した。いったい、何故笑うんだろう？

「いやな…お前、自分の状況がわかってんのかなと思ってな。今、お前は少し得意になっているようだが、一勝二敗はお前の方なんだぜ。五回勝負ってことは、お前はもう一敗たりとも出来ないんだ…。自分が追い詰められていることがわかってんのか？」

ぐうう…反論が出来ない。
雄二が言っているのは全くの正論だし、何よりプレッシャーがあるのは僕のほうだ。でも、この僕の覚悟は既に殺人を犯すギャングと化している。
その時、雄二は不意にその笑みを止め、僕にその鋭い眼差しを叩きつける。

「もしお前が次のジャンケンで負けたら、お前はもうおしまいなんだぞッ！　Ｂクラスに行くように、お前を徹底的に叩きのめしてやる！」
「……うん、それは覚悟している。僕はあんたを乗り越えるんだ」
「フン！　せいぜい頑張るんだな……ッ！」
「プレッシャーを掛けているのかい？
「どうかな……。さあ、行くぜ！」
「いや、ソイツはまだだよ」

そこで僕は敢えてそのジャンケンを止めた。
こうなった以上、雄二にもプレッシャーを掛けなければならない。それも、ジャンケンに支障がでるレベルに。
しかし、雄二に通用するプレッシャーの掛け方って…あ！

（承太郎君のあのプレッシャーを参考にさせてもらうかな）

僕はあの重くて冷徹さをもっている承太郎君のプレッシャーの掛け方を参考にすることにした。
えっと…あの承太郎君ならどうするかな？　この状況なら。

（うん、あのクールな承太郎君ならこうするだろうな）

僕はあらかた承太郎君のとりうる事象を想像して、そのなかから雄二が確実に油断しそうな事柄を選び出す。
よし、セリフも思いついた！　これならイけるはずだ。
僕は改まって雄二のほうを向いた。

「ん？　どうしたんだ？　そんなに改まって…」
「雄二…（きらきら）」
「……なんだか気持ち悪いな。少女マンガのようなそのキラキラした目はやめろ」
「じ、実は……僕は君に伝えなきゃいけないことがあって」
「伝えたいこと？」

よし、喰いついたな！

「君にとって、少しショックを受けるかも知れないけど……聞くかい？」
「勿体ぶってないで、さっさと言え」

雄二はＯＫしてくれた。
まあ、これはプレッシャーというよりはショックだろうけどね。

「実は……」
「実は？」
「僕は雄二よりも秀吉のほうが好きなあああああああああ！　折れる！　絶対折れるって！　ああそれ以上は堪忍を、堪忍をおおおおおおおおおおお！」
「やれやれだわ。まさか瑞希ちゃんとの合体技『セックス・ピストルズ』を使うハメになるとはね（ドドドドドドド）」
「明久君が悪いんですよ？　そんな悪い子にはお仕置きが必要ですね（ゴゴゴゴゴゴゴゴ）」

こ…これはヤバイ！　ジャンケンどころじゃなくなっている！
ヘタすれば僕のライフが尽きてしまう！

「明久君、『４』っていう数字は不吉だと思いませんか？」
「え？　まあそうだねぇ。僕は嫌いだな」
「そうですか」
「え！？　何だったの今の質問は！　ちょ、どうして笑いながら歩いてきてるの？　あ、今日の姫路さんは一段と可愛いね！」
「ありがとうございますね」
「吉井、私には？」
「ああ、島田さんは一段とボーイッシュで控えめクールだね（胸が）」
「『メイド・イン・ヘブン』と『サバイバー』のどっちがいい？
三秒以内に決めないとどっちも掛けるわ」
「ええええ！　理不尽じゃないかそれ！」
「ゼロ。さよなら、吉井」
「悲しいですけど、これは仕方ないんですよね」

後に明久はこう語ったという。

『人生、楽あれば苦ありっていうけど、僕の場合は”苦あれば更に苦が追っかけてくる”って所だったね』

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

ジャンケンの戦い（後書き）

終わったよ……期末テストが。
理科総合が、なんと！　『91点』だったアアア！
自身初の快挙です。

この小説は一応Aクラス戦が終わったら完結する予定です。（反響しだいですが）
感想、ここのネタを使えとかも承っております。

ちなみにこの回の承太郎ですが、既に屋上にはいません。

ジャンケン・ザ・ワールド（前書き）

この問題はとある神父さんが作ってくれました。とりあえず答えましょう。

『なあ　好奇心で聞くんだが　……君が出会った『異性』の中で……

一番『魅力的』な人って……　どんなヤツだい？　君が今まで学校中から

捜し求めたヤツでもいいし…　新しく見出した異性でもいい…』

姫路瑞希のアンサァァァーッ！

『ドジで頭は悪いけど、本当は正義感あふれる人』

プッチ先生のコメント

『ほう、君はそんな人が好きなのか。ではその恋路を見守るとしよう』

土屋康太の答え

『エロかったらよし』

プッチ先生のコメント

『君は性に関する事に詳しいそうじゃないか。いや、別に怒っているわけじゃない。そもそも性とは旧約――』

坂本雄二の答え

『霧島翔子』

プッチ先生のコメント
『別に具体的に表わさなくても良かったのだが・・・それ以上に気になるのが、何故に紙が血で汚れているのだ？　しかもＡクラスの霧島が持ってきて――そうか。同情する』

久保利光の答え
『吉井明久』
『その気持ちは良く分かる。私だって昔はある男に恋をしたものだったからな。だが、人の道を外れることはするな』

プッチ神父の総合コメント
『各個人とも、正しい恋愛をしてくれているように感じる。もっと講義を聴きたいものは『水族館』まで』

ジャンケン・ザ・ワールド

安っぽい感情で動いてるんじゃあないッ！
『人』は天国に行かなくてはならないッ！
目指したものは全ての人々をそこへ導ける！
おまえらはそれを邪魔しているんだ……
少しばかりの人間が犠牲になったからといって……
『どこへ行かれるのですか？（ドミネ・クオ・ヴァディス）』
おまえは『磔刑』だ――――ッ！！

ｂｙ　プッチ神父

「はあはあ……く、う…」
「お、おい……大丈夫なのか？　既に顔が真っ青になっているぞ……」

いや、正直ヤバイかも知れない。
島田さんには腕は折られる寸前まで曲げられるわ、姫路さんには笑顔で横四方固めを喰らわされて、正直死ぬ寸前かも知れない。あ、違うね。寸前じゃなくていつでもいけるんだったね。

「僕は『観察処分者』の吉井明久！　これしきの痛み！　へこたれぬわッ！」
「それにしては既にボロボロになるまで使われまくっても更に使役される雑巾のようじゃの」
「……ｅｘａｃｔｌｙ」

酷い！　流石にそんな雑巾みたいにボロボロじゃないよ！
せめて使役されてゴミが付いて黒くなった雑巾にしてほしいよ！
「結局はボロボロだということを肯定するのじゃな」
「……ｅｘａｃｔｌｙ」

まあ、そんなことは置いといて。

「雄二、いくよッ！」

腰を低くし、相手の動向をうかがうような姿勢をとる。
雄二もじっくりと拳を作り、姿勢を低く保つ。
これが、僕達の決闘の『流儀』というやつだ。この姿勢は『ジャンケン』という『己の道を掴み取る決闘』の、神聖な姿勢なのだ。
この姿勢は既に百年前には確立されていたのは歴史的事実として有名。その姿勢をとったなら、勝敗が決まるまで戦い抜くことが義務付けられている。つまり、これから僕達は死闘を演じるわけだ。

「……明久、覚悟は出来てるか？　俺は出来てる」
「当たりまえだよ。僕は……戦う！」
「フン、威勢だけはいいな。だが、その威勢はどこまでプレッシャーに耐えられる？　そのプレッシャーがお前を押しつぶす時、お前は敗北する」

そう、僕には後が無い。
でも、やるしかない。
ここからは、覚悟とプレッシャー、そして『勝ちたい』というただ一つの純情な思いが必要なんだ。雄二はまだ後ろがある分、その『勝利へのひたむきな執着』は僕より劣っているはずだ。
だから、僕はまだ勝機はある！

（落ち着け……　心を平静にして考えるんだ…こんな時どうするか……2…3…5…7…　落ち着くんだ…『素数』を数えて落ち着くんだ…『素数』は1と自分の数でしか割ることのできない孤独な数字……この切羽詰まった状況で僕に勇気を与えてくれる）

そうだ、僕には『素数』という心強い味方がいる。『素数』は何よりも気高く、また孤独な数字だ。

僕の心の強さで、雄二を……倒す！

「僕は僕自身の力で、雄二に勝利する！　ここで負ける訳には…いかないんだァァァァァァァーッ！」

「上等だァァァーッ！　行くぞ！」

そして僕らは――

「「ジャンケンッ！」」

生まれて初めて、神に勝利を祈った。（命が惜しいという理由で）

☆

結局のところだ。

結局のところ、ネットにはじかれたテニスボールはどっちに落ちるか分からない。

そんな時こそ……居て欲しいのが『女神』だ。

そうすれば、ボールがどっち側へ落ちても納得がいくから。

でも、その『女神』はどちらかにしか微笑まない。それは当たり前の、僕達が生きる上での分かりきったことだ。

でも。それを覆すことが出来る――いや、味方につけることが出

来る。
それは『覚悟』だ。
絶対に勝つ、という己の確固たる意思だ。『女神』はその覚悟を見て、感じてどちらかに御味方してくださる。
つまり、どちらが強く願ったか、ということだ。

「雄二。僕の……二勝目だ」

結果は、僕の勝利だった。
雄二はグーを出し、僕はパーを出した。明らかに僕の勝利だ。

「……」

雄二はその結果に言葉もでないようで、ただただ握り締めた自らの拳を見つめていた。と、そのとき、雄二はその拳を地面に殴りつけた。

「誰が言った言葉……だったか……『我々はみな運命に選ばれた兵士』…え？　くそ……　だが……この世がくれた真実もある……　運命はこのオレに……「点を稼ぎ」……「召喚」ができる能力を…授けてくれた…。間違いない……それは明らかな真実だ…　この世の運命は我が『坂本雄二』を無敵に頂点に選んだはずなのだ……オレは『兵士』ではない。くそーーッ！！　そのオレに対してッ！！　この手の中にッ『勝利』がこの手の中にないッ！　よくもッ！　こんなッ！　こんなことでこの俺が敗北するわけがないッ！」
「雄二！　やはり楽観視していたようだね」
「黙れ！　俺は頂点、この『Ｆクラス代表』だ。ここで負けるはずがないのだ！　俺は、まだ、終わっちゃいない！」
「雄二自身が、よく分かっているんじゃないのかい？　『俺はこの

ままだと負ける』って」
「……なんだと？」
雄二は床に殴りつけた拳をわなわなさせている。
これは僕の見解なんだけど、恐らく雄二自身は今、まさにプレッシャーに押し負かされようとしているんじゃないだろうか。
だってあんな雄二は今まで見たことが無いし、そもそも雄二はこういった状況に慣れていないはずだ。いつもクラスをリードしてきた雄二だからこそ、この逆境には弱い。
つまり、ここで更に追い込みを掛ければ……あるいは……。
「今…『二勝二敗』、今度の勝負で決まりだ。つまり、お互い『崖っぷち』にいるわけだよ。でもね、雄二……」
僕は更に雄二にプレッシャーを与えるために、少し間を置く。
「僕は全然負ける気がしないんだよ。まさに『女神』に祝福されている気分、とでも言っておこう。いいかい？　お互い、『二勝二敗』の五分五分の戦いだったとしても、僕は最初に二敗し、後から二勝した。でも、雄二はどうだい？　雄二は今、二連敗しているじゃないか」
「何が言いたい？」
「僕と雄二と、どちらが『のぼり調子』になっているか、よく分かるだろ？　いま、上り坂にいるのは僕であり雄二じゃない……。つまり！　今、下り坂にいるのは……雄二、君だよ」
「……くッ」
「もう一度言おうッ！　今、『下り坂』にいるのはお前だ！　『坂本雄二』！」

to be continued...

ジャンケン・ザ・ワールド（後書き）

原作では数行で終わっていたはずのところを延々と。
まあ、ネタとしてはいいんじゃないすか？
ＳＢＲ２１巻のラストは壮絶過ぎっす。

dominｅ quo vadis?（前書き）

問、以下の問いに自由に答えよ。

『人』と『動物』の違いとは　いったい何か……？　わかりますか？

姫路の答え
『天国に行きたいと願うこと』

神父のコメント
『人はそう思う……。犬やオームにその概念はないからね。正解です』

土屋（ムッツリーニ）の答え
『カメラを仕掛けて盗撮』

神父のコメント
『それはお前だけだ、土屋よ』

吉井明久の答え
『ムッツリーニが撮ってきた写真を買うこと←動物はできない』

神父のコメント
『お前もか』

domine quo vadis?

Let us, then, be up and doing,
With a heart for any fate.
Henry Wadsworth Longfellow

それでは、立ちあがり、行動しよう。いかなる運命のもとでも、精いっぱいに。

byヘンリー・ワーズワース・ロングフェロー

「そんな……あの雄二がバカな吉井に、押されて…」
「ああ、事態は全く予測不能な展開じゃな。しかし、その状況を逆転するのが『ジョジョの奇妙な冒険』というやつじゃ」
「……同意」

正直、僕だって勝負に勝てるとは思っていない。
でも、それは策略が張り巡らせられる勝負に限っての話だ。
こういうジャンケンのような『時の運』に任せるような戦いでは、雄二は策を練ることができない。ただ、『勝ちたい』という思いが左右するんだ。
そう、今までの恨みをここで……晴らす！

「明久、プレッシャーの掛け方が、ずいぶんと、うまく…なったな……」

雄二はずいぶんと体力を消耗している。
多分姫路さんの料理が原因の八割を占めているに違いない。

でもそんな雄二には情けを掛ける気はしない。

「『プレッシャー』？　何をいってるんだい雄二？　これは事実だよ。雄二が二回連続で負けているというのは『事実』なんだよ」

「ふん、『事実』か……。確かに、それは認めよう。だがな、お前がそれを言うのなら俺の方からも事実を言ってやろう」

雄二はいったい何を言うつもりなんだろう？

いま雄二は劣勢に立たされているってのに。

「お前がグーを出さなかったらブッ殺す！」

……なんだって？　『ブッ殺す』？

今雄二は『ブッ殺す』っ言ったのか？

「雄二、今なんてった？」

「はあ？　だからグーを出さなかったら『ブッ殺す』って」

「僕の前で決闘を侮辱するんじゃあない！」

「な…んだと！？」

「いいかい、雄二？　この決闘の世界には『ブッ殺す』っていう言葉は存在しない。オレたちの『決闘の世界』なら！　そこら辺の戦争や仲良しクラブで“ブッ殺す”“ブッ殺す”って大口叩いて仲間と心を慰めあってる様な負け犬どもとは訳が違うんだからなァッ！

『ブッ殺す』と心の中で思ったならッ！その時スデに行動は終わっているんだッ！」

「うわぁ……いつもの吉井の姿がどこにもないわ！」

「なんだかのぅ……兄貴の匂いがしてきたぞい」

僕は心に『覚悟』を決めている。いくら姫路さんの弁当が承太郎君のスタプラの殴る一撃より強かったとしても、奴に慈悲を与える

つもりはない。
しかしその時、その場に笑い声が響いた。
「フフフ…ははははははッ！」
「……ッ！　何がおかしいんだい？」
不気味だ。あの雄二がこの顛末において急に笑いだすなんて……。
まさか策があるのか……？
「クックック……いや失礼。この戦い、勝てるんでなッ！」
「何ィ！？　ゆ、雄二！　今なんていった！？」
「言った通りだ。貴様に勝てる『策』が浮かんだんだぜッ！」
バカな！？　この絶対的な運がすべてを左右するこの『ジャンケン』において、それは無いはずだ。
いや……元は神童と呼ばれていた雄二のことだ、何かしらの策を使うというのはあるのかもしれない。これは気をつけたほうがいいな。
「まあ、その策というのがな……。秀吉、ちょっとこっちへ来てくれ」
「ん？　何じゃ、わしを呼んだのかの？」
あれ？　秀吉を何につかうつもりなの？
「ちょっと耳貸せ。ゴミョゴミョ……」
「んな！？　そんなことをしたら明久の命が……」
えッ！？　ちょ、なに秀吉！？　その命がどうたらこうたらを説明してよ！

「あー、その、明久よ。ちょっといいかの？」

そしてこの表情をする秀吉。可愛すぎる。

「こ、このことはこんな場所でいうのもアレなんじゃがの……」

「あ、うん……」

僕の応対もちょっとおろそかになるほどに、秀吉は思いつめた顔をして。

そしてそれをはっきりと意識してしまっている僕がいて。

その秀吉はまるで――恋する乙女のようで。

耳まで真っ赤にした秀吉はとても愛らしくて。

「その、なんじゃが……」

秀吉の麗しい唇から紡ぎ出される言葉は何処か熱っぽくて。

それは正に、女の子。

秀吉を男の子と理解しながらも女の子として意識してしまっている自分が心のどこかにいて。

その気持ちは抑えきれないほど大きくて、熱くて。

そしてついに、意を決した秀吉は言葉を紡ぎ出す。

「あ、明久よ。実はその、わしは、明久のことが……」

こ、これは期待していいんだよね！？　本気と書いてマジと読むぐらいに期待していいんだね！？

「わしは……ずっと前から、吉井明久のことが好きだったのじゃあああ！」

「「……ッ！？」」

や、やった……。
ついに、遂に！！　僕にも春がきたんだね！！
と、そう思ってしまった、その時だったんだ。
「ロオオオオオーード……聞き捨てならんなぁ…。今の言葉……吉井明久ァッ！」
とっさに辺りを確認すると……。
僕は十字架に磔にされていた。
「こ……これは『ＦＦＦ団』か！？」
「左様、わが『ＦＦＦ団』では『リア充』を撲滅する軍。吉井明久、今からお前を『異端審問会』に掛ける！！」
「ウチも手伝うわ」
「フフフ、吉井君、可愛がってあげますね」
「あああ！？　まさか雄二ィ！　貴様これが狙いか！？」
「Ｅｘａｃｔｌｙ．そうだとも明久。これでお前は将棋やチェスでいうチェックメイトに嵌ったんだ。己の不幸を呪うがいいさ。はっはははは！！」
なんて卑怯な……決着が着いていないじゃないか！　おのれ……
「他人のことを心配している暇があるのか？　クックック……」
「す、須川君！？　まさか……」
「島田、姫路。先に制裁を加えても構わない」
「あ、そう？　じゃ、いっちゃいましょうか」
「はい。やっぱりアレですね」
「ヤバイ……このままじゃ…！！　ハア、ハア……オレは！オレは

ッ！　オレの側に近寄るなあああーッ！」
「「『ドミネ・クオ・ヴァディス（主よ、どこに行かれるのですか？）』！　お前は磔刑だあああああ！！」」

そうして、僕の命の花は儚くも悲しく、散っていった。

「まだだ。まだ終わっていな～い！」
「ううう……た、助けて……」
「お前をレベル５の『異端審問会』にかけ、無実であったとしてもお前をＢクラスへ連れて行く」

須川くんのその発言の裏には確実に雄二が一枚かんでいるんだな、と霞み行く意識の中で思った。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

今頃キャラ紹介（前書き）

すっかり忘れておりました。すいません。
実は最近、最新作を書いておりまして、そっちに集中してたんです。
何も描いておらず、穴埋め的にキャラ紹介を投稿しておきます。
『ＴＨＥ　ＵＮＳＵＮＧ　ＨＥＲＯ』←最新作も見てってね！　ジョジョ的なネタを入れてたりしてるから！　真面目にシリアス描いてるから……なんて……

今頃キャラ紹介

ここで何故か今頃になってキャラ紹介。

空条承太郎
召喚獣『スタープラチナ』

備考
このスタープラチナは、彼自身のスタンドを擬似的に表現したもの。
恐ろしいほどのスピードを誇り、しかも彼自身の頭がものすごく切れるために破壊力が非常に高い。
ほとんど敵無しの無類の強さを誇る。
しかもいざという時には時を止めることが可能な為、この召喚獣を超えられる者はいない。
ものすごく背が高い為に、教室の入り口を潜るようにして入らなければならないのが悩み。

吉井明久
召喚獣『Ｏｒｄｉｎａｒｙ Ｗｏｒｌｄ』

備考
この召喚獣は、良くも悪くも使用者がアレなので実体に触れる事ができる、恐らく召喚獣の中でもっともスタンドに近い。
だが、使用者があまりにバカ過ぎるため、その能力はほとんど使われない。しかも装備があまりに貧相過ぎるため、戦力としてもほとんど役には立たない。
いわゆる特攻野郎。

しかし技術があるので何とか敵と渡り合うことが可能となっている。
最近、自分の召喚獣に名前をつけたが、意外と長すぎる為にどうにか省略できないか、と悩んでいる。

坂本雄二
召喚獣『Ｍｙ　Ａｐｏｃａｌｙｐｓｅ』……だったのだが、作者がめんどいと感じてしまったため、マイケルジャクソンより、『バッド』に変更。

備考
この人物は知略に長け、目的とあらば味方さえ見捨てるというある意味非常な男。
かつては神童とまでいわれていたのだが、今では堕落しきっている。
最近ストーカーに付き纏われているのが悩み。

土屋康太
召喚獣『ＡＬＦＩＥ』

備考
非常にムッツリな男。一部からは『変態という名の紳士』として熱狂的な支持を集めている。
頭は悪いが、その場の状況判断が飛び抜けており、その場にある監視カメラの設置場所を感知することが可能である。
彼の召喚獣は保険体育の分野のみ異常なまでの強さを発揮してしまっているので、ある意味では彼はＦクラス最強なのかも知れない。
意外とイケメン。
最近、明久の女装関連の本を出版する予定。

木下秀吉
召喚獣『Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｉｔ』

備考
正真正銘の男の娘。
女以上にかわいらしく、その競争率は異常である。その為、裏組織『ＦＦＦ団』の公約の一つに、『木下秀吉に関しては、彼女の貞操を死守するのが第一』と定めている。
彼女の召喚獣は普通の戦闘力であるが、その絶大な支持団体の存在の為にあまり戦闘は行わない。というか守られている。しかしそれでも彼女は前線に突っ走る傾向があるために注意が必要である。
実は一卵性と思われるの双子の姉がいるのだが、そちらのほうはあまりモテてはいないようである。
最近、本当に男扱いされていないのが悩み。

姫路瑞希
召喚獣『ＥＹＥＳ　ＯＮ　ＭＥ』

備考
非常に頭がよく、バカなＦクラスにおいては主戦力である。
召喚獣の姿はまさに装甲騎兵。向かう所敵無しの無双乱舞が可能である。持っている武器も、敵を徹底的に叩き潰すことに効果を発揮する大剣。凄まじい乙女が居たものである。
実は明久が気になっているらしく、かつて弁当を作ってきたが、それは屠った瞬間に対象者が撃沈する、まさに科学兵器。その不味さによる即効性のある毒は、血液中に直接毒を流し込むよりすばやく対象者の脳に侵入し、一瞬で再起不能にすることができる。恐らく、

ＤＩＯとあろう人物でさえ殺傷が可能であろう。
最近、自分の弁当を食べて気絶してしまう人が多発しているが、そのことは全く気にしないという強者。

島田美波
召喚獣『Ａｎｔｈｒａｘ』

召喚獣は『アンスラックス』と読む。
この名前は明久からもらったのだが、実はこの名前は『炭疽菌』を意味しており、これは完全に明久の当て付けであることは見え見えなのだが、その名前の響きを気に入っている為に気づいていない。
実は明久が気になっているらしいのだが、事あるごとに明久を自前の技で滅殺しているために少しも関係は進展していない。
かなりのツンデレであるのだが、その割にはツンツンな発言はあまりしていない。むしろデレが多い。
最近、妹が明久に近づいて居ることに危機感を抱いている。

作者
スタンド『Ｍａｎｄｅｙ』

備考
特技はピアノ。
得意な曲は『ＭｅｒｒｙＣｒｉｓｔｍａｓ　Ｍｒ．ｌａｗｒｅｎｃｅ』と『エナジー・フロー』。
顔があまりに普通なのだが、ピアノのレベルと顔がマッチしていない為、人前では絶対に弾かないと決めている。
重度のジョジョラー。そしてかなり無謀なことをしてしまう人。

to be continued...

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3485l/

ジョジョとテストと奇妙な召喚獣

2010年10月14日14時30分発行